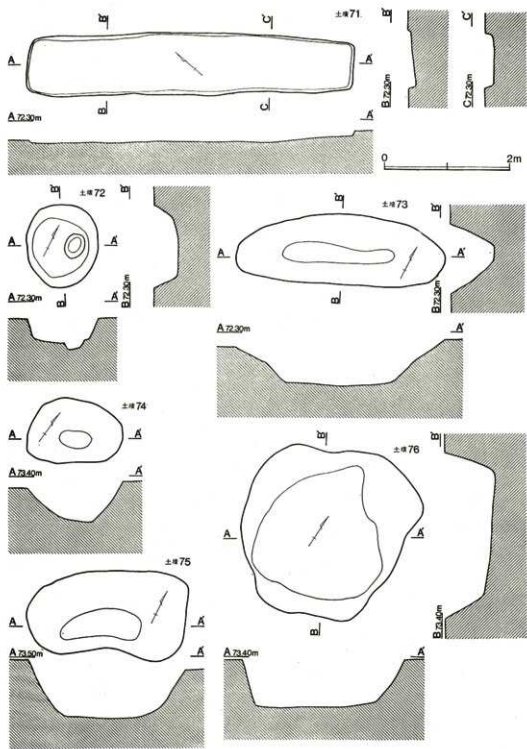
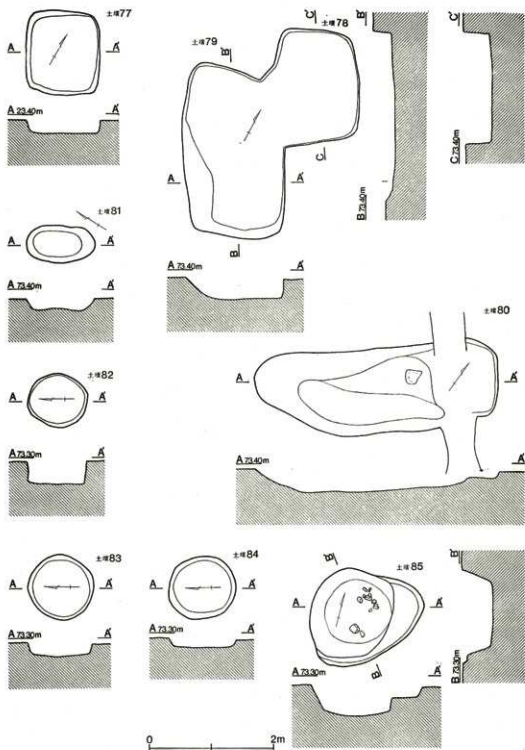


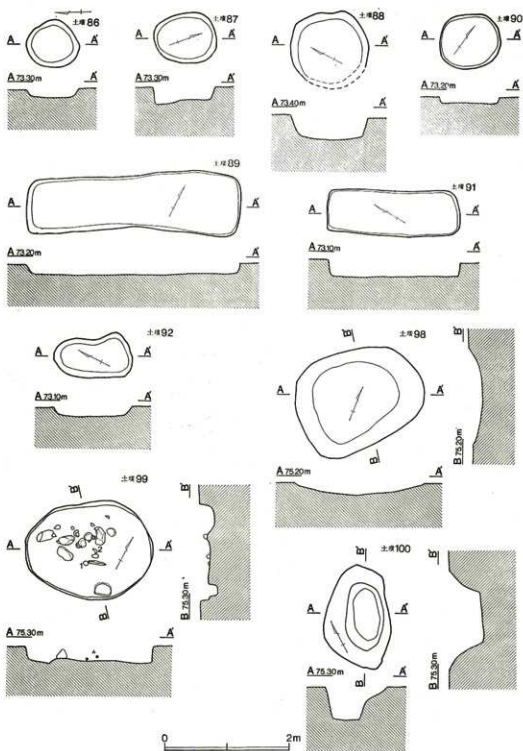
第179图 第63·64·67~70号土坑



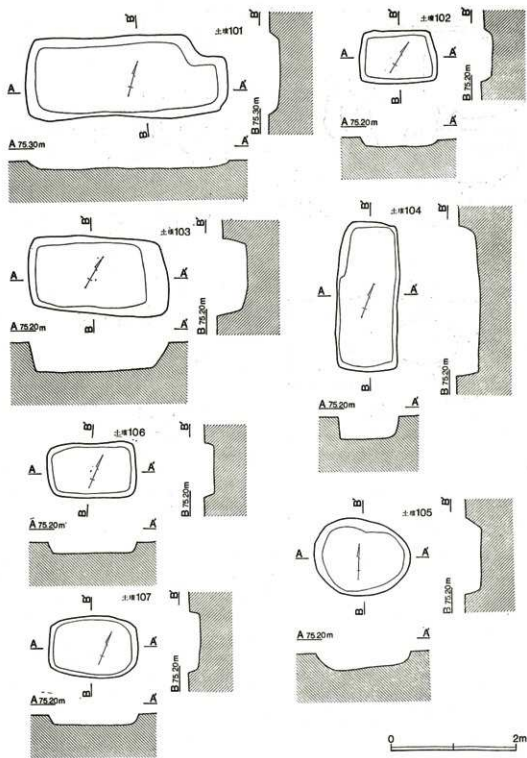
第180图 第71~76号土坑



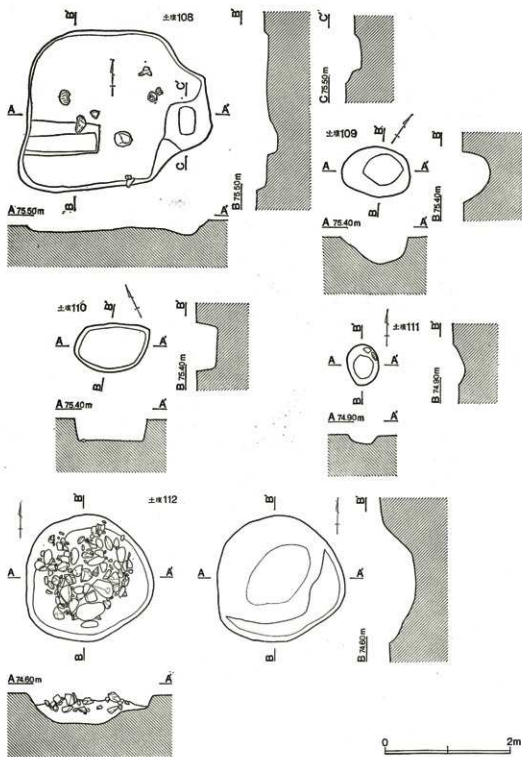
第181图 第77~85号土坑



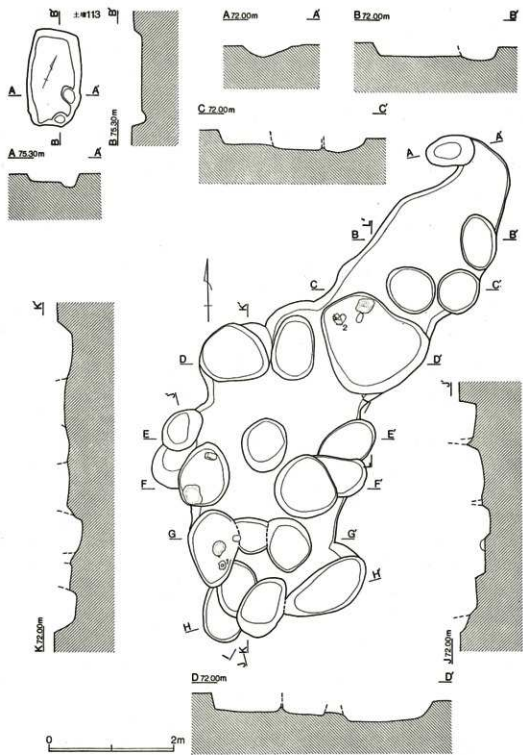
第182图 第86~92·98~100号土坑



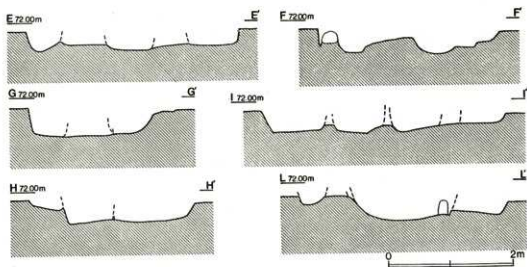
第183图 第101~107号土坑



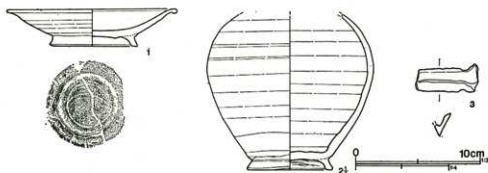
第184图 第108~112号土坑



第185图 第113号土坑、土坑群



第186図 土坑群断面図



第187図 土坑群出土遺物

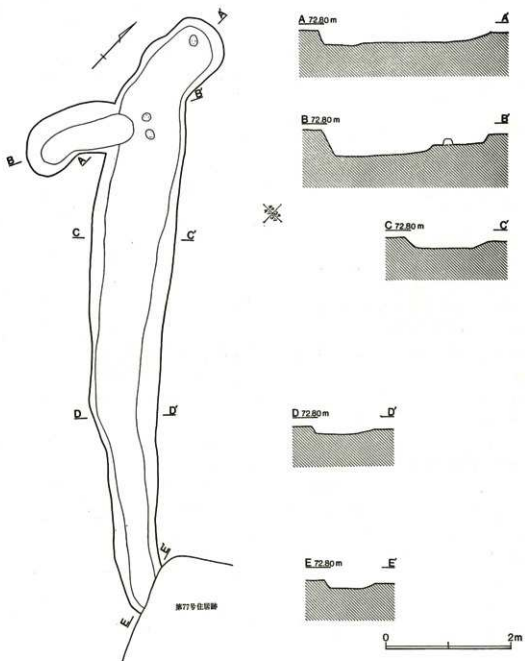
土坑群出土遺物 (第187図)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	高台付皿 須恵器	口径 13.6 高台径 7.1 器高 2.9	高台はハの字状に開き、端面は沈線を持ち内傾する。口唇は玉縁となる。	右回転撫で5周。底部右回転糸切り。高台張りつけ後内外回転撫で。末野産	胎土：0.7以下B+C+D +E 焼成：1 色調：7.5 YR 6/1 褐灰 残存：60% ビット7
2	壺 須恵器	胴径 17.5 高台径 9.0 現高 16.2	高台はハの字状に張り出し断面台形となる。胴部は上位に最大径があり脹らむ。	右回転撫で。高台付着後、内外回転撫で。胴部下位は回転笄削り。末野産	胎土：0.8以下B+C+D +E 焼成：5 色調：5 PB 4/1 暗青灰 残存：80% ビット7
3	板状鉄製品	現長 5.0 幅 1.8	横断面V字状となり鋳などの袋の部分とも考えられる。	鍛造？。外面が平滑となり直線である。	重量：16.60g

4 溝状遺構

第1号溝状遺構 (第188図)

4一ツ区に位置して、南東端で第77号住居跡と切り合う。全長9.5m、幅0.95~1.35m、深さ0.4



第188図 第1号溝状遺構

mを測る。北東方向に走り、一端は北に、一端は東に曲るが、両端ともすぐ消滅すると考えられる。北の屈曲部の手前では、南方へ枝分かれするが、すぐ終東する。溝の横断面は西側の立ち上がり急で深く、底は西へ傾斜する。性格・時期については、出土遺物もなく不明である。

第2号溝状遺構(第189図)

この溝は細い割には広い範囲で検出されている。起点は33-C区にあり、北へ曲るが途中で切断する。しかし再び西方に走り、37-C区で南へ屈曲し南下する。37-E区で南東へ向い直線的に延び、35-A区まで至る。溝の走る範囲は南北55m、東西40mの間をくの字状に走るわけであるが、その内側には第1ピット群が存在する。溝の幅は約0.4mで、深さ0.1mと浅く、横断面皿状となる。溝底の標高は北側で72.9m前後であるが、南では73.2mと高くなっている。出土遺物もなく、時期についても性格についても不明である。

5 ピット群

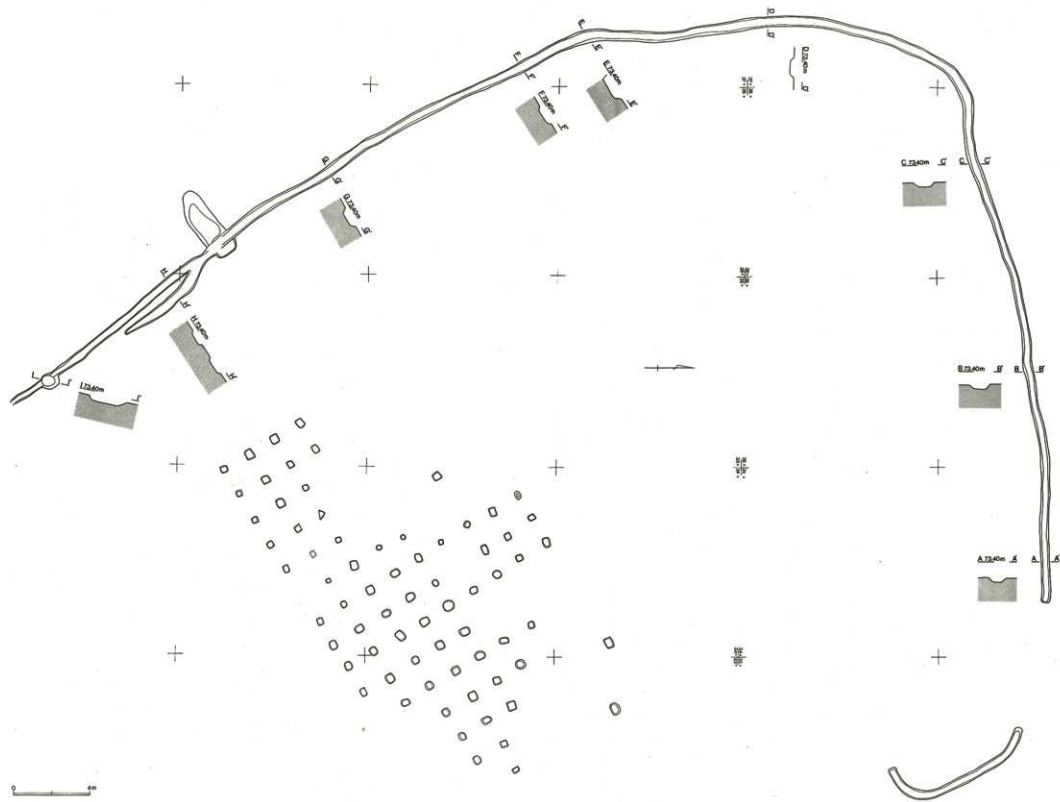
第1ピット群(第190図)

33-E区、34-K区に位置し、方形ピットが等間隔に並ぶ遺構である。長軸方向はN-58°-Eで、約21.2mを測り、15例のピットが並び、南北方向では12.2mで9列のピットが並ぶ。ピットの大きさは0.3-0.95mで、0.6m前後のものが多い。平面形は方形で、ピット間は0.4-1.6mと等間隔を置いて造られている。

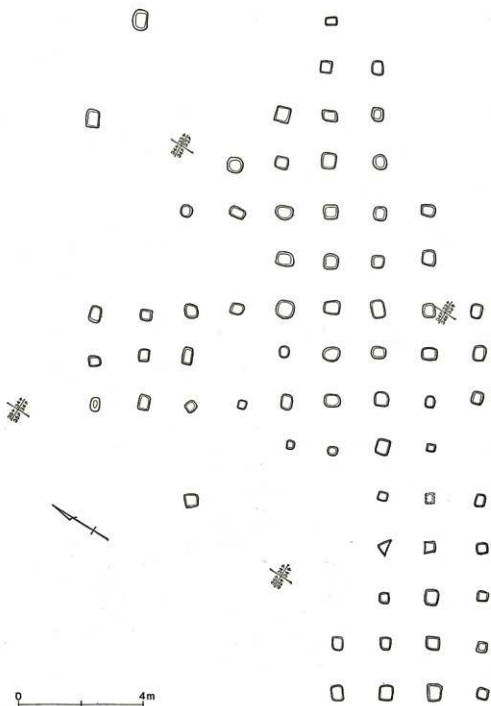
現在欠損しているピットもあるが、本来南北9列、東西12列は明確に存在したと考えられる。発掘時、このピット群を寺院跡と考えていたが、明確な根拠もなく、また柱穴としても本来このだけの総柱が建つ建造物は考えられないため、建物跡とするには疑問である。出土遺物もなく性格については桑などの根の掘り形とも考えられるが、不明としておく。

第2ピット群(第191図)

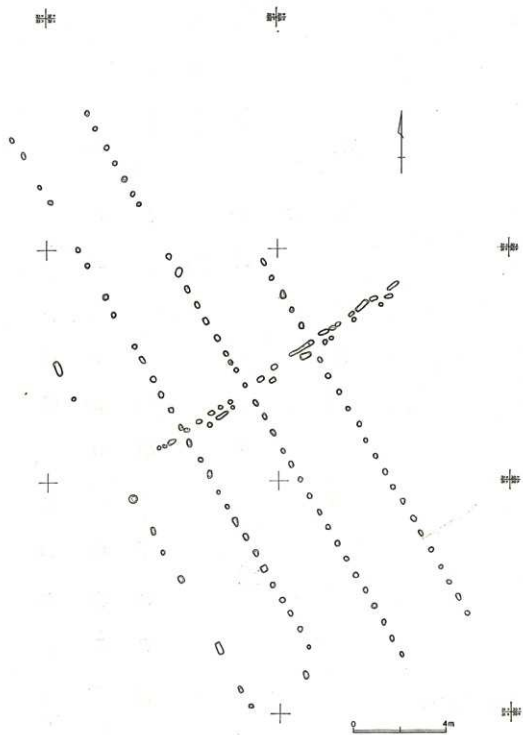
31・32-E区に位置するが、北西方向約28m、北東方向約15mの範囲に確認されたピット群である。長軸である北東方向の方位はN-30°-Wである。北東の並びは4列確認され、北西方向はほぼ中央に1列だけ不整ピット列をつくるが、北東の並びと僅かにずれる。ピットの形態は円形から楕円形で、ピットの大きさは0.1-0.2mで、ピット間は0.8m前後である。このピット間は長軸方向については同一で、4列が並んでいる。4列のそれぞれの間隔は3.15mである。長軸の方位は第1ピット群の短軸方位N-32°-Wと2°しかずれていないことから、両者は関連を持って存在した可能性がある。しかし形態、間隔など全く違いこちらは櫛列状の配置となる。



第189図 第2号溝状遺構及び第1ピット群 (断面は $\frac{1}{100}$)



第190図 第1ピット群



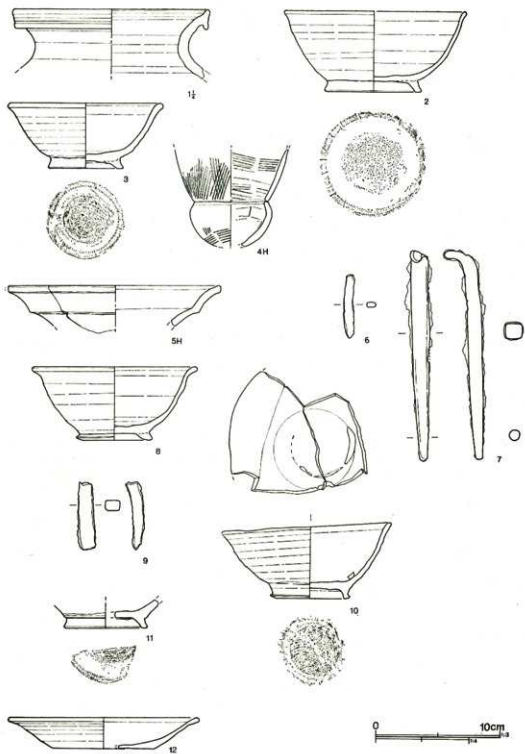
第191図 第2ピット群

Ⅶ グリッド・トレンチ・表採遺物

当遺跡は広大であり、調査開始段階のトレンチ・グリッドで上げた遺物も多い。これらの所属遺構については、グリッドが広いこと、遺構が近接していることから不明なものが多い。遺物の中で注目すべきものとして、193図—27および196図—8の鋳造墩脚である。これと同類のものが、第93号住居跡（工房跡）から出土しており、当遺跡の製鉄工程の中で、鋳造作業が広く行なわれていたことを示す遺物と言える。他に羽口（第194図—51～53）、搬入土器（第196図—3・4・5）などがある。

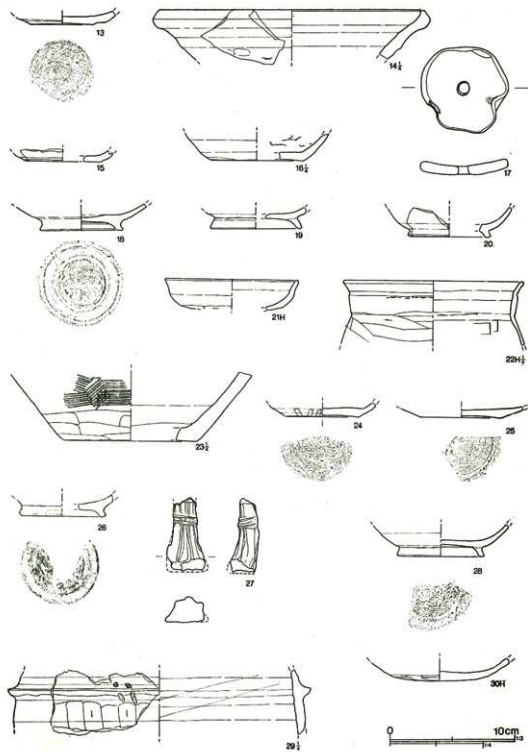
Ⅰ区トレンチ出土遺物（第192～194図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	壺 須恵器	口径(20.1)	肩部はあまり張らず、口縁は緩やかに外反して開く。口唇端面下に窪みを巡らす。 —12列—1	右回転撫で。頸部には特別の接合痕はみられない。末野産	胎土：B+C+E 焼成：5 色調：N 4/0 灰 残存：11%
2	高台付 埴 須恵器	口径(14.6) 高台径 7.2 器高 6.5	径が大きくしっかりとハの字状に開く高台から、器内が薄く一定した体部が内彎しながら開く。口縁部は僅かに外反。 —13列—2	右回転撫で7周。底部右回転前引き糸切り。高台貼りつけ後右回転撫で。末野産	胎土：C+E+F+G+H 焼成：4 色調：5 Y 6/1 灰 残存：底部100%、口縁部13%
3	高台付 坏 須恵器	口径(12.4) 高台径 4.1 器高 5.3	径の小さな底部から体部は大きく開き、口縁はやや外反する。高台は太くハの字状に開く。 —13列—1	右回転撫で9周。底部右回転糸切り。高台張りつけ後右回転撫で、坏部内面に重ね焼き痕。末野産	胎土：0.5以下C+H 焼成：4 色調：5 B 3/1 胎青灰 残存：底部100%、口縁部38%
4	埴 土師器	柄取部径 (6.0) 現高(7.3) 図上復元	大きく開いた底部より、短く窄まり、口縁は内彎気味に開く。 —15列—2	器面摩滅。巻き上げ後、内面体部は木口による左→右の撫で。口縁部内面は横位外面は縦位の刷毛撫で。五領期	胎土：C+F+G 焼成：1 色調：10 Y R 8/3 浅黄橙 残存：口縁部75%、坏部45%（接合しない4片）
5	壺 土師器	口径(17.1)	大きく開いた口縁は段を持って更に外反する。 —15列—1	粘土紐2段より成る。器面摩滅の為整形痕不明。赤彩の痕跡あり。五領期	胎土：C+F+G+H 焼成：3 色調：5 Y R 6/6 橙 残存：8%
6	棒状鉄 製品	現存長 5.1	やや屈曲しており、扁平である。 —13列ム—3	重く、割がれ方が鍛造品のように薄く割がれない。	重量：6.60g
7	釘 鉄製品	長さ 16.8	上部10cmはほぼ長方形を呈し、以下は角がとれて丸くなり先端約3cmのところは正門となる。 —13列—4	鍛造品。	重量：98.42g



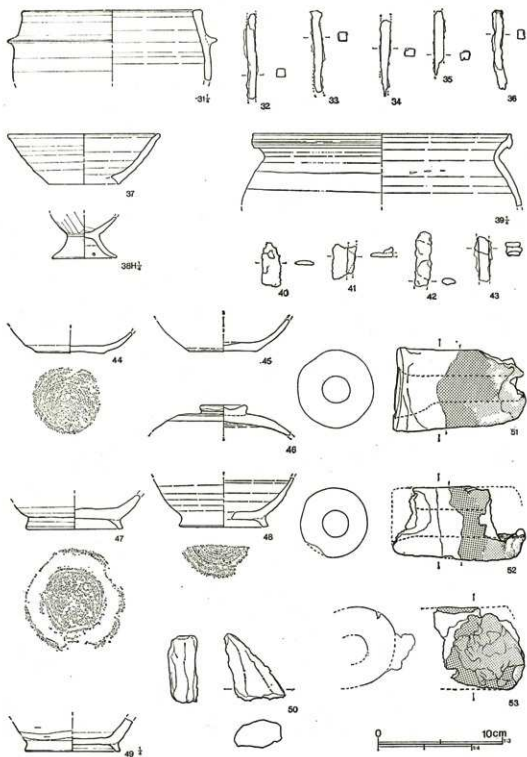
第192図 I区トレンテ出土遺物(1)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
8	高台付 坏 須恵器	口径 13.3 高台径 6.1 器高 5.9	高台は低く形も崩れる。口縁は強く外反し、玉縁状となる。この形態の類例は第78号住居跡5・6にある。 —16列—1	右回転撫で8周。底部整形は高台貼付時の右回転撫でによりほとんど消される。 末野産	胎土：0.7以下C+E+F+G+H 焼成：2色調：2.5YR7/3浅黄 残存：底部100%、口縁部30%
9	鉄製品	現存長 5.4	やや屈曲し、厚味がある。 —16列—4	鍔には目がなく、鈎造品の可能性もある。	重量：27.21g
10	高台付 坏 須恵器	口径(13.7) 高台径 6.4 器高 5.8	高台はほぼ直立し、接地部は内側となる。器形も歪む内面に重ね焼き時の高台が貼付くが、高台径は小さい。 —トレンナー—1	右回転撫で9周。底部右回転糸切り。高台貼付後右回転撫で。底部に焼成時の亀裂。 末野産	胎土：細A 焼成：5色調：5PB4/1暗青灰 残存：底部100%、口縁部23%
11	高台付 碗 須恵器	高台径 (6.7)	高台はへの字状に開き、端部全面で接地する。 —表採—2	右回転撫で。高台貼付後右回転撫で。底部右回転糸切り。 末野産	胎土：細A 焼成：2色調：5Y5/1灰 残存：約25%
12	皿 須恵器	口径(15.4) 底径(8.0) 器高(2.5)	底径は広く、体部はへの字状に大きく開き、口縁は更に開く。 —表採—1	右回転撫で7周。底部周辺右回転刮削り。 末野産	胎土：0.5以下C+E+G 焼成：1色調：5Y6/1灰 残存：約25%
13	坏 須恵器	底径 5.1	体部は下端に張りをもつ。 —4列—3	右回転撫で。底部右回転糸切り。 末野産	胎土：C+E+F+H 焼成：4色調：5YR5/4にふい赤褐 残存：80%
14	捏鉢 須恵器	口径(28.0)	体部は大きく開き、口縁は内彎気味に立つ。 —4列—2	右回転撫で後、口唇部は更に撫でられる。 末野産?	胎土：B+F+G 焼成：4内面は生焼 色調：10YR4/1褐灰 残存：約8%
15	坏 須恵器	底径(6.4)	体部下位に張りをもつ器形。 —5・4—1	右回転撫で。底部右回転糸切り。 末野産	胎土：細A 焼成：2色調：2.5YR5/2暗灰黄 残存：20%
16	碗 須恵器	底径(9.6)	底部はやや上げ底。体部は開く。 —5列—2	粘土帯積上げ後、右回転撫で。底部右回転刮削り。 南北企産	胎土：B+G+H+I(1cm-4) 焼成：5色調：5Y5/1灰 残存：26%
17	紡錘車 須恵器	長径 7.3 短径 6.3 孔径 0.9	甕類の体部を利用したもの。図右側の窪みは使用痕。 —4列—1	図上面には右回転撫で痕が窺える。 末野産	胎土：C+D+E+F+G 焼成：2色調：2.5YR7/2明赤灰 重量：40.52g
18	高台付 皿 須恵器	高台径 6.7	高台は接合部で太くへの字状に開き接地部は外側。 —5・4—1	右回転撫で。底部右回転糸切り、高台貼付後右回転撫で。更に端を棒状工具による右回転撫で。 末野産	胎土：B+G 焼成：2色調：10YR7/3にふい黄橙 残存：底部のみ



第193図 I区トレンチ出土遺物(2)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
19	高台付 埴 須恵器	高台径 (7.3)	高台は細くハの字状に開き 端部は丸味をもつ。 —5列—3	右回転撫で。底部右回転糸 切り。高台貼付後、右回転 撫で。末野産	胎土：C+D+E+H 焼 成：2 色調：5YR6/4 にふい橙 残存：約25%
20	高台付 埴 須恵器	高台径 (6.7)	高台は短くハの字状に開き 接地部は内側、体部は下端 で張る。 —5・ミ—2	右回転撫で、高台貼付後右 回転撫で。末野産	胎土：B+F+G 焼成： 3 色調：10YR5/2 灰黄 褐 残存：約20%
21	坏 土師器	口径(10.8) 現存高 (2.5)	口縁部は緩い稜をもって立ち、 短くハの字状に開く。 赤彩か？ —5列—4	外面底部挖削りと口縁部横 撫での間は開き、寛撫で付 けされる。内面も横撫で。	胎土：E+F+G+H 焼 成：4 色調：5YR6/4 にふい橙 残存：8%
22	甕 土師器	口径(19.0)	肩部は余り張らず、頸部は 開き気味に立ち、口縁部は 短くハの字状に開く。 —5列—5	口縁部と頸部の境は、葬状 工具による撫でが一周する 肩部横位～斜位の挖削り。 内外面に粘土帯積上げ痕。	胎土：C+E+F+G 焼 成：3 色調：2.5YR5/6 明赤褐 残存：40%
23	甕 須恵器	底径(14.0)	底部は僅かに上げ底となり 体部は大きく開く。 —5列—1	体下部挖削り。上部平行叩 き目。内面は撫で。底部挖 削り。末野産	胎土：B+C+E+G 焼 成：3 色調：7.5YR5/1 灰 残存：約25%
24	坏 須恵器	底径(5.9)	底部はやや器内厚く内径の 方が広い。 —6列—2	右回転撫で。底部右回転糸 切り。内外面に火押。 南比企産	胎土：B+G+I(1cl=3) 焼成：5 色調：2.5Y6/1 黄灰 残存：49%
25	皿 須恵器	底径(6.3)	底部はやや上げ底。 —6列—3	右回転撫で。底部右回転糸 切り。末野産	胎土：0.5以下B+C 焼 成：4 色調：5Y4/1 灰 残存：25%
26	高台付 埴 須恵器	高台径 6.9	短い高台はハの字状に開き 接地部は内側となる。 —6列—1	右回転撫で。底部右回転糸 切り。高台貼付後、右回転 撫で。末野産	胎土：B+C+E 焼成： 3 色調：2.5YR5/1 黄灰 残存：75%
27	獸脚 鉄製品	現存長 (5.8)	前面には縦位に3本の隆帯 で脚を表現し、横位に2本 の隆帯。背面は平らにな る。第93号住居跡の鋳型と 比べると小型であり、香炉 のようなものか。 —7・モ—5	鋳造品。錆は塊状に剥れ る。	重量：73.13g 分析資料
28	高台付 埴 須恵器	高台径 (7.0)	細い高台はハの字状に開き 端部はほぼ平ら、底部は上 げ底となる。器内は薄く一 定。 —7列—3	右回転撫で。底部右回転糸 切り。高台貼付後右回転撫 で。末野産	胎土：C+E 焼成：3 色調：N4/0 灰 残存：約 25%
29	羽釜 須恵器	口径(30.8)	鋳は小さく、鋳には斜に孔 が2つ穿たれる。	鋳貼付後横撫で。胴部は上 →下の挖削り。内面は横撫	胎土：D+E+F+G 焼 成：4 色調：7.5YR6/4

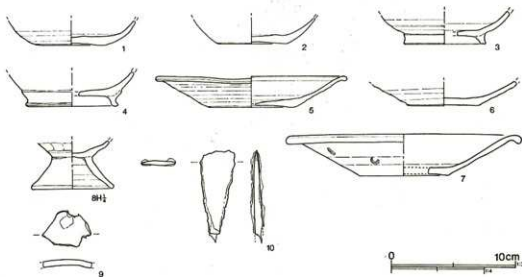


第194図 I区トレンチ出土遺物(3)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
			Ⅰ-7列-1	で。末野産	にふい櫃 残存:13%
30	坏 土師器	底径 8.0	底部は僅かに丸味をもち、中央部が肥厚する。 Ⅰ-7列-2	粘土帯積上げ後横撫で。底部外面無縁篋削り。	胎土: B+E+F+G 焼成: 4 色調: 5 YR 6/4 にふい櫃 残存: 80%
31	羽釜 須恵器	口径(19.2)	鈔は小さく断面はほぼ三角形となる。鈔下部より内傾し、口縁部は肥厚して立つ。 Ⅰ-8列-1	右回転撫で。鈔貼付後横撫で。地点から第25号住居跡に所属か。末野産	胎土: B+C+D+E+H 焼成: 2 色調: 7.5 YR 6/6 橙 残存: 18%
32	鉄 鉄製品	現存長 6.8	僅かに屈曲する。断面は方形を呈する。 Ⅰ-8・モ-2	鍛造品。	重量: 9.29g
33	鉄 鉄製品	現存長 6.5	32と同様の形態を呈する。 Ⅰ-8・モ-2	鍛造品。	重量: 8.14g
34	鉄 鉄製品	現存長 6.1	僅かに屈曲し、断面は長方形を呈する。 Ⅰ-8・モ-2	鍛造品。	重量: 6.45g
35	鉄 鉄製品	現存長 5.1	直線的。断面は長方形で、三角形の切込みが入る。 Ⅰ-8・モ-2	鍛造品。	重量: 5.30g
36	鉄 鉄製品	現存長 6.3	僅かに屈曲し、断面は長方形。 Ⅰ-8・モ-2	鍛造品。	重量: 8.13g
37	坏 須恵器	口径(12.3) 底径(5.8) 器高(4.0)	器内厚い底部から体部は大きく開き、短い口縁は内彎して開く。Ⅰ-11列-1	右回転撫で。底部から体部にかけて6周確認できる。末野産	胎土: B+E+F+G 焼成: 3 色調: 10R 5/6 赤 残存: 48%
38	台付甕 土師器	台径(6.9)	台部は低く八の字状に開く。Ⅰ-11列-3	甕底部内面は木口撫で。外面は篋削り、台部は横撫で。	胎土: F+G+H 焼成: 4 色調: 10R 4/6 赤 残存: 30%
39	甕 須恵器	口径(27.3)	肩部はあまり張らず、頸部で緩く括れ、短い口縁が直立する。Ⅰ-11列-2	粘土帯積上げ後、右回転撫で。	胎土: B+C 焼成: 4 色調: 10 YR 4/1 褐灰 残存: 口縁部12%、肩部20%
40	鉄 鉄製品	現存長 3.5	扁平で先が尖る。 Ⅰ-11・メ-4	鍛造品。	重量: 3.38g
41	鉄 鉄製品	現存長 2.8	幅広く扁平。柄の部分が結付く。Ⅰ-11・メ-4	鍛造品。	重量: 4.10g
42	鉄	現存長 4.3	扁平だがやや厚味をもつ。	鍛造品。	重量: 5.11g

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
43	鉄製品 鉄製品	現存長 3.6	錆化顕著 —11・メー4 錆化著しく2本の柄部が錆つく。 —11・メー4	鍛造品。	重量: 04.76g
44	杯 須恵器	底径 5.6	底部は僅かに上げ底となる 体部は下端に張りをもって開く。 —12列—3	右回転撫で。底部右回転離し 糸切り。 末野産	胎土: 細A 焼成: 4 色 調: 5PB 4/1暗青灰 残 存: 底部のみ
45	杯 須恵器	底径 5.5	径の小さな底部より体部は 大きく開く。 —12列—7	右回転撫で。底部右回転糸 切り。 末野産	胎土: F+G 焼成: 2 色調: 2.5Y6/2灰黄 残存 : 底部50%、体部30%
46	蓋 須恵器	つまみ径 3.9	蓋部は天井部の張る形態と なる。つまみは扁平な宝珠 形。 —12列—4	右回転撫で。天井部外面は 右回転篋削り、つまみ貼付 後右回転撫で。 末野産	胎土: D+E+F+G 焼 成: 2 色調: 5Y 6/1 灰 残存: つまみ100%、身70 %
47	高台付 碗 須恵器	高台径 7.8	高台は細くハの字状に開き 接地部は内側となる。杯部 は器内厚い。 —12列—5	右回転撫で、底部右回転離 し糸切り、高台貼付後右回 転撫で。 末野産	胎土: D+G+H 焼成: 3 色調: 5Y 5/1 灰 残 存: 底部のみ
48	高台付 碗 須恵器	高台径 7.2	高台はハの字状に開き、接 地部は内側。底部と体部下 半は器内厚く上部で薄くな る。 —12列—6	右回転撫で。底部右回転糸 切り。高台貼付後右回転撫 で。 末野産	胎土: C+D+E+G 焼 成: 4 色調: 5Y 6/1 灰 残存: 30%
49	長頸瓶 須恵器	高台径 (10.0)	高台は細くハの字状に開く 器内は底部で薄く体部下 端は厚くなる。 —12列—2	右回転撫で。外面右回転篋 削り、棒状工具になる撫で 痕、底部指撫で。高台貼付 後右回転撫で。 末野産	胎土: 0.5以下B+C 焼 成: 5 色調: N 4/0 灰 残存: 30%
50	脚 鉄製品	現存長 5.3	斜返は割れ口である。断面 は長方形を呈する。 —12列ハ—11	鍛造品。大変重い。	重量: 116.09g
51	羽	長さ 10.5 外径 5.3 孔径 2.3	口部に鉄滓の付着は少ない 口部は融解して黒色ガラス 化する。還元部の範囲が広 い。基部は径が僅かに太く なり、孔部も擦れて太くな る。 —12列—8	棒に粘土を巻きつけ、表面 は板に押しつけて多面形に 整える。	胎土: 0.5以下Aとスサを 多量に混入。
52	羽	長さ 10.7 外径 5.5 孔径 2.2	基部と口部の大部分を欠損 鉄分の付着少ない。基部の 方が僅かに細身に括れる。 口部先端は融解して黒色ガ ラス化。 —12列—9	棒に粘土を巻いて成形、表 面には指頭痕が残り、孔部 は篋状の工具で撫で上げた 痕跡あり。	胎土: 0.8以下Aとスサを 多量に混入。

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
53	羽	現存長 7.2 外径(6.3) 孔径(2.3)	口部約1/4が残る。口部には鉄滓が厚くこびりつく。先端は黒色になるがガラス化していない。 —12列—8	棒に粘土を巻きつける。	胎土：0.5以下Aはやや少なく、スサを含む。

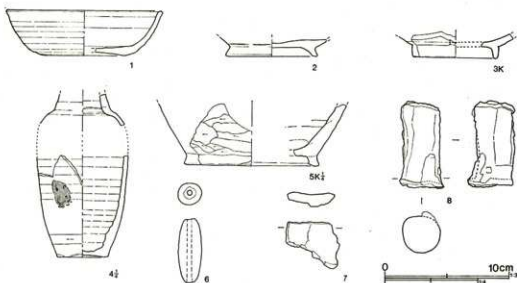


第195図 I区表採遺物

I区表採遺物 (第195図)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	杯 須恵器	底径 5.8	底部は僅かに上げ底となる。体部は下端に張りをもって開く。 —表採—2	右回転撫で。底部右回転糸切り。 末野産	胎土：0.3以下C+F+G 焼成：4 色調：10YR7/2 灰 残存：65%
2	杯 須恵器	底径 5.7	底部は僅かに上げ底となる。体部はへの字状に開く。 —表採—5	右回転撫で。底部右回転糸切り。 末野産	胎土：1.4以下B+C+D +E+F+G 焼成：3 色調：N3/0灰 残存：70%
3	高台付 碗 須恵器	高台径 (6.3)	高台は比較的丁寧な造りではほぼ直立する。器内は一定で体部は内彎して開く。 —表採—6	右回転撫で。底部右回転糸切り。高台貼付後、右回転撫で。 末野産	胎土：B+C+G 焼成： 4 色調：N4/0灰 残存： 38%
4	高台付 碗 須恵器	高台径 (7.4)	高台の形態は崩れる。体部はへの字状に開く。 —表採—7	右回転撫で。底部右回転糸切り。高台貼付後、右回転撫で。 末野産	胎土：0.5以下B+C+D +E+G 焼成：2 色調： 2.5Y7/3灰 残存：25%

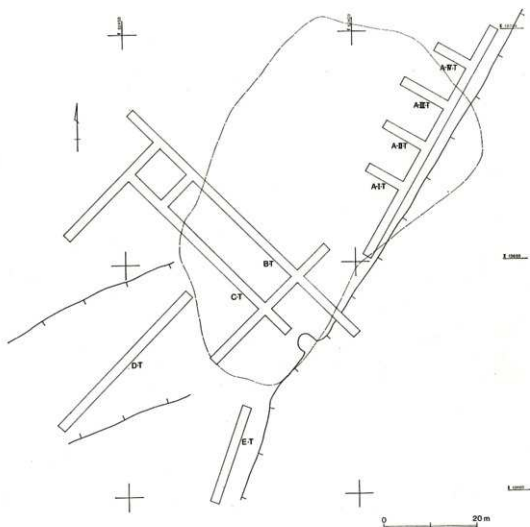
番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
5	皿 須恵器	口径(15.4) 底径(7.2) 器高(2.5)	器形は歪む。底部はやや上げ底となり、口縁は玉縁を呈する。Ⅰ—表採—1	右回転撫で。底部右回転糸切り。底部外面に重ね焼時の粘土が付着する。末野産	胎土：0.4以下C+E+G 焼成：2 色調：2.5YR 7/2 灰 残存：底部50%、 口縁部30%
6	皿 須恵器	底径 5.9	器内は底部で厚く体部で薄い。鉄付着。Ⅰ—表採—3	右回転撫で。底部右回転軋し糸切り。末野産	胎土：C+G 焼成：4 色調：N3/0 灰 残存：底 部のみ
7	皿 須恵器	口径(19.0) 底径(7.2) 器高(3.3)	底部は僅かに上げ底となる。器内は体部下端で薄く口縁部で肥厚し玉縁となる。鉄滓付着。Ⅰ—表採—8	右回転撫で。底部右回転糸切り。還元焼成。末野産	胎土：0.3以下B+C+D +E 焼成：3 色調：2.5 Y6/1 灰 残存：30%
8	台付甕 土師器	台径(8.7) 接合部径 4.3	台部はへの字状に開く。端部は角をもつ。鉄付着。Ⅰ—表採—4	底部内面木口撫で、外面横篋削り。接合部横撫で。台部も横撫で。	胎土：C+E+F+G 焼成：3 色調：2.5YR6/8 橙 残存：底部と接合部 100%、台部13%
9	鉄製品	現存長 4.0	同一の破片が5~6個出土しているが、接合は不能である。Ⅰ—表採—9	鋳造製。鋳鉄独特の塊状割れを呈する。	重量：12.65g
10	鎌 鉄製品	現存長 7.4	上部は扁平。下部は窄まり厚味も増す。Ⅰ—不明—1	鍛造製。	重量：19.46g



第196図 W区A・B・Cトレンチ、B地区、表採遺物

Ⅳ区トレンチ

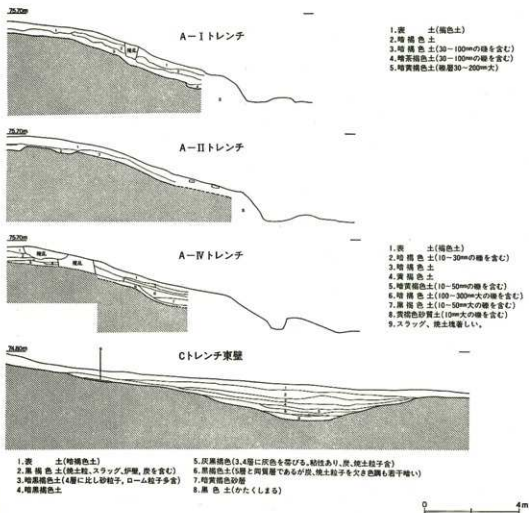
段丘斜面および段丘上に試掘のために入れたトレンチである。第197図の点線の範囲は黒色土が分布する範囲である。北東方向に入れたAトレンチ・北西方向のB・Cトレンチ、その南西には北東方向のD・Eトレンチがあるが、この中でA-ⅣとCトレンチに鉄滓が確認できた。



第197図 Ⅳ区トレンチ設定図

Ⅳ区A・B・Cトレンチ、B地区、表探遺物（第196図）

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	杯 須恵器	口径(12.6) 底径(7.2) 器高(3.6)	底部は径が大きく上げ底となる。器肉は底部と体部の境で厚くなるが一定。つくりも丁寧。Ⅳ-C-T-1	右回転撫で。現状7周。底部右回転糸切り。末野産	胎土：B+C+F+G+I (1cd=3) 焼成：5 色調：2.5YR5/1黄灰 残存：16%



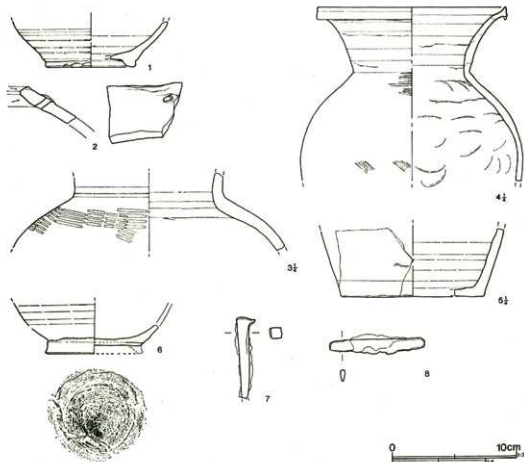
第198図 N区トレンチ土層図

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
2	高台付 坩 須恵器	高台径 7.4	高台はへの字状に開く。 N-トレンチ-2	右回転撫で。底部摩滅のため不明。高台貼付後右回転撫で。末野産	胎土：0.7以下B+C+E+F+G 焼成：2色調 10YR 7/4 にぶい橙 残存：底部のみ
3	高台付 坩 灰釉	高台径 (6.8)	高台はほぼ直立し、端部は丸味をもつ。坏部内面に重ね焼きの輪状の色の差あり。 N-P. B-1	右回転撫で。坏部下位右回転削り。東濃産?	胎土：夾雑物ほとんどなく精良 焼成：5級黒色調 10YR 7/1 灰白 残存：高台20%

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
4	細頸瓶 灰釉?	底径(5.5) 胴径(9.7)	底部は上げ底となり、最大径は胴上部になる。肩部はあまり張らずに頸部は緩やかに窄まる。壺Gか。鉄滓付着。Ⅱ-トレンナー-1	右回転撫で。特に胴下位は深いロタロ目がつく。底部静止糸切り状の右回転糸切り。外面胴下位右2回転の篋削り。東海産?	胎土: B+E少 焼成: 4 堅緻 色調: 5Y7/1灰白 残存: 上半50%、下半40%
5	高台付 瓶 灰釉?	高台径 (14.4)	高台は下半でやや開く。接地は中央部である。釉は認められず須恵器かとも思われる。Ⅱ-A-T.-1	右回転撫で。胴下位右回転不連続糸切り。底部は篋状工具による右回転撫で。還元焼成。東海産	胎土: B+C少 焼成: 4 堅緻 色調: 7.5YR4/1灰 残存: 高台25%
6	土 鉢 土師質	長さ 5.2 直径 1.9 孔径 0.4	最大径を中位にもち、両端へと窄まる。端部は丸味をもつ。Ⅱ-表採-1	棒に粘土を巻きつけて造るが、整形は不明瞭。	胎土: F他 焼成: 4 色 調: 2.5YR6/6橙 残存: 100% 重量: 16.47g
7	容器状 鉄製品	現存長 3.8	僅かに屈曲する。長辺が一部膨らむが錆か不明。	鋳造品。	重量: 29.82g
8	獸脚? 鉄製品	現存長 7.0 直径 3.1	獸脚の可能性があるが、断面が丸い。大変重量がある。	鋳造品。	重量: 266.37g 分析資料

Ⅴ区A・B地点、表採(第199図)

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	高台付 碗 須恵器	高台径 (7.4)	高台は低く太い。接地部は外側。体部は一度立ち丸味になって開き、中位に張りをもつ。Ⅴ-P-A-1	右回転撫で。底部は不明。高台貼付後右回転撫で。末野産	胎土: 0.4以下C+E+F +G+H 焼成: 4 色調: 7.5YR6/4にふい橙 残 存: 40%
2	無頸壺 須恵器	口径(7.5) 孔径 0.5~ 0.68	頸部を篋でカットして無頸とする。頸の僅か下に外から右方向へ斜に穴が開けられる。Ⅴ-A-1	粘土帯横上げ後、右回転撫で。還元炎焼成。末野産	胎土: 0.7以下B+C 焼 成: 4 堅緻 色調: 5PB 4/1暗青灰
3	甕 須恵器	頸部径 (15.9)	肩部は丸味をもち、緩やかに窄まる。外面に自然釉付着。Ⅴ-P-A-1	粘土帯横上げ後、右回転撫で。胴部には平行叩き目痕。還元炎焼成。末野産?	胎土: 0.8以下C他 焼成: 4 色調: 10BG3/1暗 青灰 残存: 30%
4	壺 須恵器	口径部 (20.0)	胴部上半に最大径をもち緩やかに窄まる。頸部から口縁部は朝顔状に開く。口縁部内外に粘土接合痕が見ら	粘土帯横上げ。外面細かな平行叩き、内面年輪の浮き出た青海波文。口縁丁寧な右回転撫で。還元焼成。胴	胎土: C+I(極く微量) 焼成: 4 堅緻 色調: 5P 6/1紫灰 残存: 胴上半30 %



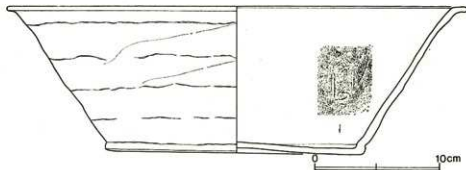
第199図 V区A・B地点、表採遺物

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
5	壺 須恵器	底径 15.2	底面はほぼ平らで、体部も直線的に開く。 Y-P. A-3 Y-P. B-1	上半部に自然釉。南比企産 右回転撫で。外面胴下端右1周の回転刮削。底部に棒状工具で起した様な痕跡が残る。末野産?	胎土: 0.7 以下C+G 焼成: 3 色調: 10 YR 6/1 褐灰 残存: 15%
6	高台付 壺 須恵器	高台径 (7.9)	高台はハの字状に開く。体部は下端に張りをもって開く。 V-表採-1	右回転撫で。底部右回転糸切りが2度なされるが、上は矢張で、いわゆる円柱造りではない。高台の接合痕明瞭。還元焼成。末野産	胎土: 0.2 以下B+C+D +E+H 焼成: 4 堅緻 色調: 5 Y 4/1 灰 残存: 60% 口縁欠

番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
7	釘 鉄製品	現存長 6.5 太さ 0.8× 0.85	断面はほぼ方形を呈する。	鍛造品。	重量：13.97g
8	刀子 鉄製品	現存長 7.7 厚さ 0.4	細身で、やや厚い。	鍛造品。	重量：12.25g

黒田第17号墳出土歴史時代遺物（第198図）

古墳出土の中世土器と考えられる。口径37.1、底径21.0、器高11.8cmで、器厚は0.4～0.7cmと薄い。形態は平底で、外傾する体部を持ち、口唇部は水平に突き出す。体部には粘土接合痕が4本明瞭に確認できる。底部は内耳埴と同様砂床に置いたようである。内面は外面に比べ平滑に撫でられ内側底面の端に刻印が押されていたが判読できなかった。焼きは土師質で焼成もよく浅黄色（2.5 Y 7/3）を呈し、胎土は石英、角閃石などの微砂粒を含んでいた。時期については類例がなく明確でない。



第200図 黒田第17号墳出土歴史時代遺物

Ⅷ 結 語

1 古墳時代前期の遺構と遺物

台耕地遺跡の五領期の住居跡は12軒確認できた。しかしその中には第1号、10号、19号、47号、56号住居跡のように、遺物は検出されないが住居形態から五領期と判断したものがある。

五領期の住居群は第二段丘の最も高いところの、72mラインに沿ってほぼ直線に並ぶ。住居群の北西側は、第三段丘に沿って北東から浅い谷が入るが、住居群は浅い谷への落ち始めにある。

第47号、56号住居跡は住居群から100m以上離れ、第二段丘上にそれぞれ存在する。住居群の方位が北東から入る谷に沿うためか、N-21°30'~60°-Wであるのに対して、段丘中央の2軒は僅かに西を向き、遠いを見ることができる。

住居形態はほぼ隅丸方形であるが、地山が礫層であるため炉は未確認であり、柱穴も不明確な住居が多い。しかし貯蔵穴は第7号、10号、11号、19号住居跡で確認できた。

出土遺物は量的に少ないが、第20号、38号住居跡で良好なセットが確認できた。この2軒の住居跡を中心に他地域との遺物の比較を行ないたい。

まず第38号住居跡では埴、埴、器台、高坏、壺、甕、S字状口縁台付甕などが出土した。埴および埴、壺(38-11・19)は篋削りが施されている。特に壺38-19は刷毛目を施した後、篋削りして、さらに篋磨きを行なっている。これに対して甕38-14、壺38-13は刷毛目を施した後、荒い横位の篋削りを行なう。この他台付甕は刷毛目が多用されるが38-17は細かく、器台38-7と同類の工具であるとともに、形態も類似する。S字状口縁台付甕38-15には横刷毛は見られない。

形態の特徴として、器台は台付甕製作途中の形態を示し、孔部は大きく貫通する。埴は僅かに上げ底で、口縁は大きく開く。S字状口縁台付甕の口縁は張りが少なく、鈍くなる。

台耕地遺跡では他に第20号住居跡のセットが良好である。いずれも焼成が甘く、灰白色であり、刷毛目が見られない。高坏も脚が細長く、第38号住居跡と同時期か僅かに後出するであろう。

第17号住居跡にもS字状口縁台付甕が出土するが、第20号住居跡例よりもさらに崩れる。しかし共存する甕は刷毛目を施した後、横篋削りを行なうことからほぼ同時期であろう。第11号住居跡には台付甕が出土するが、胴下半部に篋磨きが施され、刷毛目が見られないことから、より後出的である。

このように台耕地遺跡の五領期の土器群は第17号、38号住居跡例と、それに続く第11号、20号住居跡例に分けられる。集落構成は台耕地遺跡の中では直線に集中して見られるが、二時期に渡り営まれたと考えられるならば、同一の要因のもとに、継続してつくられた集落である。その要因は西に落ちる谷に水田のような生産基盤があったためと考えられる。

台耕地遺跡第38号住居跡土器群と類似するものに、大里郡妻沼町苅藤吾新田遺跡第3号住居跡(田部井1976)、木庄市下田遺跡第5号住居跡(増田ほか1979)、見玉町雷電下遺跡第25号住居跡(横川ほか1979)、大里郡那珂町水窪遺跡第1号住居跡(栗原・佐藤1976)などが見られる。いずれも五領

期の三期区分の第3期古式にあたるであろう。耕田地遺跡第20号住居跡の土器群は下田遺跡第39号住居跡例に類似し、五須期最終末と考えられる(塩野・増田ほか1981)。

2 古墳および出土遺物について

石室

古墳は黒田第17・20・21号の3基が検出されたが、第21号墳は周溝のみで、ここでははぶく。

黒田第20号墳は残りはよいが、河原石の天井石はすでに石室内に転落していた。根石および奥壁の石を除けばいずれも河原石が使われ、側壁はやや大き目の河原石の間に模様積みとまでいかないが、小さな石を詰め込んでいた。石室の平面形態はやや胴張りを持つ両袖型であるが、石室の最大幅は奥壁近くにあり、奥壁がやや狭くなる徳利型となる。

当古墳の含まれる黒田古墳群は、かつて「30基にあまる古墳があった」(塩野・小久保1975)という。1974年の発掘調査では消失したのも含め19基が確認され、それぞれの古墳に番号が付された。黒田第17号墳はその段階で確認されていたが、他の第20・21号墳は未確認であったため、今回新たに番号を付した。

黒田古墳群の主体は全長41mを測る前方後円墳である第2号墳を中心に、10数基が近接して群を構成しているが、今回発掘した第17号墳および、第18・19号墳は、群の中心から北東へ300m以上離れている。

1974年の発掘では13基が検出されているが、内部主体は片袖型を1基含む、無袖型を主体とした狭長な長方形プランである。時期については6世紀後半から7世紀初頭の年代に比定されている。埴輪を持つ古墳は9基あり、第11号墳では埴輪頂部から帽子・靴が検出されている。

今回発掘した第17・20号墳は胴張りを持ち、過去の発掘例と相違を見せている。

黒田古墳群の近辺には荒川左岸の小前田・見目、右岸の箱崎・塚原・鹿島・赤浜古墳群が見られるが、胴張りを持つ石室は小前田87・88号墳、同古墳群内の北塚屋遺跡で3基、見目古墳群で1基、箱崎古墳群で2基確認されている。この他鹿島古墳群では27基調査したすべてが胴張りを持つ石室であった。いずれも古墳群中では数少なく、時期的により新しいと考えられる。

黒田第17号墳の石室に類似するものとして児玉町長沖9号墳(菅谷1980)などに見られるが、菅谷浩之氏は9・10・21号墳をC類に分類され、9・10号墳が埴輪を持たないことから後出的であり、これらの古墳は埴輪消滅前後に位置づけられるとした。また南塚原5号・8号墳に類例を求め、7世紀前半に比定された。

これに続く時期として児玉郡美里村塚本山古墳群(横川ほか1977)があげられるが、模様積みの石室を主体としている。埴輪を持つ15号墳(6世紀末)、1号墳(7世紀前半中頃)以外はいずれも7世紀後半から8世紀初頭に築造されたとする。また黒田古墳群のやや下流に位置する鹿島古墳群(三友国五郎ほか1973)もほとんど埴輪を持たず、8世紀初頭まで築造されたという。

遺物

黒田第17号墳石室から直刀1、鉄鏃4以上、刀子2、金環2、ガラス玉4が、墳丘および周溝か

ら土師器杯1、甕1、須恵器壺1、甕片、埴輪類は太刀形2、馬形、円筒などがある。第20号墳石室から鉄鏃1、小刀1が出土し、埴輪は周溝から1片検出されたが、伴うか疑問である。

第17号墳の太刀形埴輪は2点出土するが、1点はほぼ完形であり、勾金の三輪玉が釘状に3個4列配される。また第32図1の三輪玉は、最下位に釘状のものが逆三角形に配されるなど、いずれも三輪玉の形式から崩れている。

完形の太刀形埴輪の出土状況から、埴輪頂部に樹立されていたもので、黒田第11号墳から帽子形、靴形埴輪が出土することと類似する。このように埴輪頂部に器財埴輪が置かれることが多く、同様に須恵器大甕を置くことも関連を持つようである。

円筒埴輪は上位葺石帯下位に樹立されたようで、2点が倒れているが旧状を保つように出土した。その間隔は1.2mあり、採集できた円筒埴輪片からも、ほぼその間隔で樹立されたか、あるいは部分的に立てられたと考えられる。仮に全周樹立したとすれば30本前後と推定できる。

土師器は杯がまだ深い丸底を保ち、鈍いが稜の残る鬼高期の杯である。

以上から古墳の年代にふれてみる。胴張り石室で黒田第17号墳により類似する例は長沖第9号墳であるが、黒田第17号墳が埴輪を持つこと、土師器あるいは鉄鏃などから、6世紀末から7世紀第1四半期と考えられる。次に黒田第20号墳は石室の長さ 비해幅が狭く、奥壁も狭いこと、後込みが見られない特徴がある。また鉄鏃が新しい形式であること。埴輪が全く検出されていないことからも第17号墳より後出的であり、7世紀前半代と考えたい。

塩野氏は黒田古墳群を6単位群に分類されているが、第17・20号墳は胴張り石室であり、距離も隔たることから別単位群と考えられる。

3 平安時代の遺構と遺物

1) 台耕地遺跡の出土土器について

(1) 器種

須恵器

杯類は平底杯と高台杯がある。平底杯の主体は底部糸切り離しであるが、1点だけ篋切り離しがある(50-1、50は住居跡名。1は図版の遺物№。以下同じ)。糸切り後、周辺篋切りを行なった杯が第48号、73号住居跡から出土する。これらより底径が小さくなる新しい形態の中に、器高が低く皿との中間形態の杯(77-4・5、78-2)がある。さらに新しくなる形態に、小さな底部から大きく外反し、体部が丸く脹らんだ後、口唇にて大きく外反する杯(78-1、93-3)がある。この形態は高台の付く例(78-5・6、95-1)があり、壙との区別がなくなってくる。高台付杯の古い例として1点だけ44-7があるが、8世紀後半代の形態であり、同時期の遺構は見られず混入であろうか。このほか土師器的な24-1、97-2の杯があるが、いずれも新しいと考えられる。

壙類は平底と高台付があるが、南比企産が平底、末野産が高台付で、後者が主体を占る。また大形と小形に分けられるが、大形は数が少ない。平底の壙は9-5、48-14、74-5があるが、これ

らにはつまみの付く蓋9-4、13-5、50-11が伴なうようである。これに対して末野産の高台付埴にはつまみのない蓋60-5・6・9・14、66-7、85-9が伴うが、口唇端部が鋭い三角形につくられる60-5・14、天井部が丸く、口唇屈曲部の内面が沈線状につくられる85-9、口唇が薄く外に開く66-7に分類される。これらはいずれも古い段階で消滅するようである。埴の高台のつくりは、総じて古い例は高く、均一の厚さで強く張るが、新しくは低く、撫でが下手で接合痕が明瞭である。大形は83-8、93-12があり、前者は口径18.3cmを測る。これは轆轤回転撫でが12周みられるように、特に末野産の埴類の轆轤目は明瞭で回転数が多い。

皿類は高台を持つ例はほとんどなく、76-14、99土坑-2、土坑群-1だけである。皿は小形と大形に分類できるが、前者が主体であり、大形品は8-4、59-2、61-5、76-16で口径18.3~22.8cmを測る。

小形の皿は口唇端部が矩形となり、底部から大きく外反する例(77-25・26、87-13)、玉縁状に大きく外反する例が見られ、台耕地遺跡では後者が主体である。主体となる後者は、底部から大きく外反する例(75-6、76-12、87-12、93-13)と、体部で脹らんだ後、口唇が大きく反る例がある。

鉢は73-8、87-14が小形品で、底部が糸切り離しの数少ない例である。このほか本来広口甕に入れるべきであろうか6-4、44-12、49-24、77-33、89-8がみられる。肩の張りが強く口唇が大きく外反する6-4、肩の張らない49-24、77-33があり、後者がより新しい。また口唇端面中央が窪む6-4、89-4、端面に突帯を巡らす49-24があるが、後者の方が新しい傾向にある。

甗は土師器にはなく、須恵器も極く僅か66-10、74-11、76-33が確認できただけである。66-10は中央に細長い長方形、両端に半月形の孔が開くと考えられるが、県下にはこの例はほとんどない。岡部町六反田遺跡A区堀2(梅沢・石岡ほか1981)ではこれに類似した例があるが、3孔と推定されている。74-11は推定口径31.9cmを測る大形品で、体部は直線的に開く。76-33は体部に突帯を巡らし、孔部は大きな単孔で、孔部内側に棧を渡したと考えられる未貫通の穴が、等間隔に開けられている。埼玉北部に類例は多く、六反田遺跡A区堀2、同A区47号住居跡、寄居町沼下遺跡グリッド出土品(大和1982)のほか、生産跡で寄居町南大塚Ⅱ遺跡2号窯から出土している。この他江南村熊野遺跡13号住居跡(中島ほか1974)からは突帯が巡らないもの、群馬県清里・陣場遺跡42号住居跡(中沢悟ほか1981)からは孔部の穴の見られないものが出土した。埼玉北部から群馬にかけて、短い時間の中で捉えられる甗である。

羽釜は25-23、79-4・5があり、数は少ない。このほかトレンチからIT-29、IT-31が出土するが、前者の胴部には斜めに2孔が貫通する。類例は六反田遺跡42号住居跡にあり、紐を掛ける孔であろうか。

壺は細頸に属するものとして4-4・5、81-8、96-2、土坑群-2、4T-4などがある。4-4・5とも肩は張らず、最大径が胴中位にあり、高台が低いのに対して、81-8は肩がやや張るなどやや古いと考えられる。96-2は4-4・5と高台のつくりは類似するが、胴径が大きい。4T-4は平城宮の壺Gに分類されるものである。大形の壺では肩の張る44-16、把手の付く76-17、広口の76-19・21がある。

甕は44—21、50—20、59—12、64—7、76—29・32・34・36・38、83—11、V—A・B—4などがある。

まず大甕の44—21は口径46.6cm、器高88.5cmを測り、これに類するものは64—7、76—36がある。また76—34も同類であるが、波状文を持つ南比企産の製品である。この他、口縁の短い59—12もある。これら大甕の用途は49—25、64—7など砂鉄の付着する例が見られることから、砂鉄容器の可能性がられる。

広口甕は76—29・31・32、83—11、V—A・B—4であるが、V—A・B—4は南比企産で、胎土つくりとも良い。

この他関東以西からの搬入須恵器として48—17（長頸瓶）、49—8（高台付坏）があるが、前者は畿内の壺Gで、年代の限定できる資料である。

灰釉陶器

44—17、49—17、61—6、75—7、76—23、77—29・30、83—10、4T—3があるが、他の小片も含めても坏・埴類は4T—3の1点だけで、他地域との様相を異にしている。

土師器

土師器は坏、鉢、甕類だけである。

坏は約20個体出土するだけで、数は少ない。49—9は体部中位に稜を持ち、内面に放射状の暗文を施す唯一の例である。他は平底に近い例と、削りにより丸底風にした例がある。前者は須恵器の形態に近い74—1、77—11～14と、体部中程が括れ、口唇が内彎する50—10、60—13、66—5・6と、体部中央が括れるが、口唇が外反する59—1がある。後者は削りにより丸底と稜がつくり出され、口唇の内彎する73—4・5と、削りが体部まで及び稜が強く、底部は平底に近く、口縁が外傾する85—5・6、稜が不明確で浅い丸底の95—2・3がある。

鉢は44—9と49—18がある。44—9は大振りで口径20.9cmを測る、つくりの良い器形である。

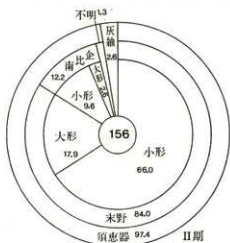
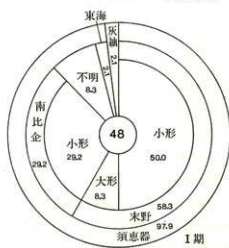
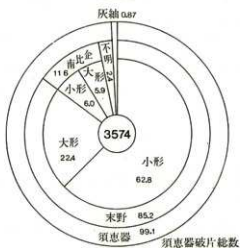
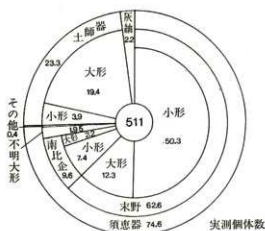
甕は小形の台付甕と大形の甕があるが、台付甕の全体のわかる例はなく、60—15、76—25、77—36、89—5がほぼ良好な資料といえる。60—17は小形で台の付かない甕である。

大形の甕も完形資料は少なく、6—6、21—1・2、43—6・8、48—16、49—20～22、59—7 62—7、66—25・26、73—12が形態の推定できる資料である。この中で21—1・2、49—20～22は体部も厚手で口唇も肥厚する、新しい時期の甕である。主体となるのはコの字状口縁であり、やや古い形態として、頸部から大きく外反する50—15・16、73—12がある。

(2) 産地

台耕地遺跡の須恵器は長石、石英、片岩、軟質酸化粒など夾雑物を多く含む製品が主体を占め、荒川上流5～7kmに分布する末野窯跡群の製品であることが容易に分かる。しかし甕など大形品の一部については、窯跡の資料も少なく不明な点が多い。末野窯跡群²²以外では南比企窯跡群の製品があり、土は精良で、白色針状物質を含む製品などもあり、末野産とは区別が可能である。

これらの須恵器と土師器、灰釉、実測した個体数の割合を出したものが第201図—1である。小形品と大形品に分けたのは用途の違い、搬入する距離の違いが現われないかと考え、坏・埴類を小



第201図 須恵器の生産地別搬入率

形品として扱い分類したものである。

まず須恵器と土師器、灰釉の割合は33.9:10.6:1で圧倒的に須恵器が多く、土師器は須恵器の1/5以下である。これは末野の須恵器生産地が近くにあることが起因していると考えられる。また、土師器の小形品が少ない点も、須恵器が補完しているためであろう。それに対して土師器の大形品すなわち煮沸用具である甕類が多いのは、須恵器を補うものである。

第201図-1から土師器だけ抜いたものが第201図-2である。南比企産と比べ末野産が多く、6.4:1の割合である。小形、大形品の割合については、南比企、末野ともそれ程の違いはない。遠方から搬入された南比企産の器種の中で、高台付壺・壺、皿が欠けているのは、生産量の違いであろうか。

台耕地遺跡の須恵器と灰釉の破片3574点を産地別に分けたものが第201-3図であるが、割れた時の破片の数のため南比企、末野とも大形品の割合が高くなるが、ほぼ第201図-2と類似する。

南比企産の製品は荒川を渡り搬入されるが、台耕地遺跡から17km離れている。末野窯跡群が5~7km近く、それも河川沿いの搬入の好条件な地にありながら、南比企窯跡群の製品の割合の高さは汎武蔵国、一部に相模、下総、上野国に至る供給圏を持つ一大窯跡群だけでは片付けられない背景を持っていると考えられる。末野窯跡群の製品は荒川をそれ程南下していないと考えられ、南の南多摩窯跡群、東金子窯跡群と同様に、生産地からそれ程遠くない地域を補完する窯跡群であったと考えられる。

(3) 編年

関東における須恵器編年は多くの先学によって成されているが、特に南多摩窯跡群の製品を検討して編年を組まれた服部敬史・福田健司氏の研究(服部・福田1979・1981)は体系的で評価できる。このような南武蔵の編年に対して北武蔵の編年は宮昌之氏によって作成された(高橋・宮1983)ものの、その内容は東金子、南比企、末野あるいは新明などの各窯跡群の資料から成り立っており、各窯跡群での体系的な編年は行なわれていない。しかし金子真土氏の分析(金子1982)によれば、南多摩窯跡群と東金子・南比企窯跡群を比較すると、武蔵国内では基本的にほぼ同一の傾向をもって生産が推移するということである。

末野窯跡群の編年体系は未完成で、埼玉県立歴史資料館で行なわれた分布調査で16支群91基の窯跡が確認され、各窯跡の採集遺物から年代を推定し、窯跡の時期別分布を行なっている(石岡ほか1979)。続いて浅野晴樹氏により集落出土の末野産の須恵器を灰釉の年代から編年された(浅野1980)。集落調査の件数に比べ末野窯跡群の調査は少なく、末野窯跡群全体の特色も充分に捉えられていない段階である。

A 編年基準について

台耕地遺跡の平安時代の土器は、須恵器坏底部全面施釉りから羽釜まで見られ、それら土器群は技法、形態の消長から5期に分けることが可能である。

第1期は底部未切り後、周辺施釉りを行なう坏、あるいは行なわないうまでも形態の類似するものを含む時期である。当期にはまだ皿は出現していない。

第Ⅱ期は底部承切り後、未調整の坏が主体となる時期で、皿が出現するとともに、つまみのない碗の蓋もこの時期から見られる。この皿と蓋は同様な形態から、ほぼ同時期に出現するであろう。

第Ⅲ期は坏の底径がさらに小さくなり、碗の蓋につまみの付く例はなく、付かない蓋も少なく、蓋の存続はこの段階で終了する。土師器では49—20のような厚手で、縦削りを施す甕が出現する。

第Ⅳ期は78—1の坏と高台付坏が出現する段階で、コノ字状口縁の土師器甕の最終末である。

第Ⅴ期は土師質の坏97—2、あるいは羽釜の出現する段階で、コノ字状口縁の土師器甕は消滅する。

台耕地遺跡では末野窯跡群の製品が主体を占めることから、本来同窯跡群の編年との比較が必要であるが、編年が未完の状況から、基本的にはほぼ同一の傾向をもって生産が推移するという、他地域の編年を援用して流れを追ってみたい。その場合集落跡であるので生産跡との様相も異なると思われ、新旧が混在する可能性もあるが、各期に納まると考え、セット関係を重視して進める。

B 編年

○第Ⅰ期

第13号、48号、50号、52号、73号住居跡が該当するが、各住居跡ともそれぞれ良好なセットを持つ。器種は須恵器坏、碗、高台付碗、同蓋、鉢、壺、甕、土師器坏、甕がある。

須恵器

須恵器は坏が50—1のように底部寛切り離しを1点含むほか、48—1・2が承切り後全面寛削り73—1～3が周辺寛削りされる。切り離しおよび切り離し後の調整に時代差が窺えるが、集落内ではほぼ同時期に捉えられると考えている。底部再調整される坏は73—3を除いていずれも南比企産であることは、この段階での南比企窯跡群の優位性が窺える。

高台付碗は完形がないため全体は不明であるが、高台は高く、厚さも一定している。碗の蓋は48—13、50—11は口径18cmと16.2cmで、それぞれつまみを持つ。前者は中窪み後者は擬宝珠となるがいずれも南比企産である。

瓶48—17は平城宮などで壺Gと呼ばれ、平城宮後期に出現し、長岡京を主体に、一部平安京に出土する年代の限定できる資料である。この壺は細身と太身があるが細い方であり、東海産の可能性がある。

甕は50—20、73—9とも深い平行叩きが施され、後者は叩きの後、内面を寛削りしている。

土師器

土師器の坏は50—10、73—4・5があり、50—10は体部中央が僅かに窪むが、いずれの坏も丸底に削り出され、口唇は内彎する。甕は50—15、73—12のように頸部から大きく外反するものと、48—16のようにコノ字状口縁となるが、口唇の短い例がある。

灰釉陶器

灰釉陶器は1点だけ52—3の瓶高台部があるが、高台も太く、0—10号窯式以降と考えられる。

○第Ⅱ期

第Ⅰ期と第Ⅱ期の間は僅かに時期差があると考えられ、第43号住居跡などがこれを埋めるものかもしれない。

この期の住居が最も多く、第9号、44号、60号、61号、79号、87号、89号住居跡は良好なセットを持っている。器種は須恵器坏、埴、高台付埴、同蓋、皿、高台付皿、鉢、壺、甕、土師器坏、小形台付甕、甕、灰釉瓶、浄瓶がある。

須恵器

坏は底部右回転糸切りの未調整で、底径が小さくなる形態が主体であるが、1点だけ底部周辺手持ち篋削りが施される坏84-4を共伴する。また高台付坏44-7の破片が1点出土するが、屈曲部に違いが見られるものの、G9号窯（服部・福田1981）に形態が類似し、8世紀後半代の器形である。当集落にその段階の遺構はなく、混入時期が問題となる。坏の形態は直線的に開く例（44-1直線的に開いた後、口唇が外反する例（60-2）、体部が脹らんだ後、口唇が外反する例（79-1）などに形態分化し始める。

皿は当期に初めて出現するが、南多摩窯ではG59号窯、北武蔵では新久A-1号窯で出現する。また高台付皿はG59号窯式に見られるが、北武蔵では不明確である。当遺跡の皿は薄く、口唇が大きく外反する小形の61-4、同形態で大形の61-5、小形と同形態で高台を持つ土坑群-1などがある。また体部が直線的に開き、口唇が矩形となる87-13がある。

埴は無高台と高台付があり、前者は南比企産で、後者は末野産である。無高台の9-5はつくりがよく、全面篋削りが施され、「月」の篋書きがみられるが、87-7は底部未調整で、轆轤の引きが悪い。高台付埴は高台部が高く一定の厚さを保ち、埴部の張りは少なくなる。高台端部は水平・外傾、内傾など各種ある。

埴の蓋はこの期につまみのない60-5・9、85-9が出現する。これに対してつまみを持つ蓋は減少する傾向にある。台耕地遺跡では、つまみのない蓋はいずれも末野産である。天井部が平らな60-5、丸い85-9、口唇が三角形となる60-5、丸くなる60-9、85-9があるが、60-5の方がより古い形態である。

鉢は6-4、44-12、89-4があり、いずれも同形態で強く外反する口縁を持つが、44-12の方が小形である。

壺は81-8、土坑群-2などがあり、高台は高く、胴径に比べ小さい。

甕は44-13の広口甕、44-21、64-7の大甕がある。広口甕は大きく外反し、口唇中央に突帯が巡る。大甕は叩き成形であるが、64-7が平行叩き目、青海波当て目が付着するのに、44-21は内外とも無文の叩き、当て具を使用する。

土師器

坏は60-13が体部中央の括れる例、85-5・6が平底に近いが、削りにより体部下位に強い稜を持ち、僅かな丸底につくられる例である。60-13はⅠ期の50-10の系譜を引くかもしれないが、85-5・6は台耕地遺跡では不明確である。

鉢は44-9が1点だけで、口径20.9cmを測り、口唇は僅かに外反する。

小形甕は62-6・10の台付甕があり、口縁は頸部が内傾し、口唇が外傾してやや長くなる。大形甕は62-7のように頸部が内傾し、口唇の短かい例、6-6、89-9のように頸部が外傾し、長い口唇がさらに外傾する例がある。

灰釉陶器

61—6の瓶と44—17の浄瓶がある。浄瓶は口頸部が欠けるが精緻なつくりで、受口部が塊状を呈し、体部が細身の卵形で、高いことから、IG—78号窯式と考えられる。また61—6も同時期であろう。

○第Ⅲ期

第Ⅲ期からはスムーズに続いている。この期の住居はやや減少し、第3号、49号、66号、77号、84号住居跡が良好なセットを持っている。器種は須恵器が坏、埴、高台付埴、同蓋、皿、高台付皿鉢、飯、甕、土師器が坏、埴、小形台付甕、甕、灰釉瓶がある。

須恵器

坏は第Ⅲ期にて形態分化し始めたものが、さらに明瞭に区別できるようになる。直線的に開く3—1、直線的に開いた後、口唇が大きく外反する49—2、体部が膨らんだ後、口唇にて外反する66—1、84—1などがある。第77号住居跡ではこれらが共伴することから、同時期の所産であろう。高台付坏(49—8)が1点だけあるが、東海からの搬入品と考えられる。

埴は無高台と高台付があり、前者は減少し始めている。74—5はⅠ期から同様に南比企産で、底部は回転削りを施す。Ⅱ期との違いは口縁が外反しないことであるが、はたして当期まで全面削りが残るものか、検討が必要である。高台付埴は丸味を持ち、口唇が短かく外反し、高台が短かくハの字状に開くのがこの期の特徴である。58—4、83—7は腰が張り体部が上方に開き、高台が細部まで丁寧につくられる。大形埴として83—8があげられ、口径18.3cmを測るが薄く、轆轤回転撫で12周の精緻なつくりである。

埴の蓋はつまみの付く蓋が消滅するとともに、つまみのない蓋も減少し66—6だけが存在する。薄いつくりで、口唇は開く。

皿は小形で高台のない76—12、77—26、84—6、高台のある99土坑—2、大形の76—16がある。Ⅱ期との変化はあまり見られないが、やや底径が小さくなる傾向がある。高台皿99土坑—2はⅡ期の土坑群—1に比べ全体に薄く、皿部が扁平で、高台が細く高くなる。

鉢は49—24、77—33が見られ、Ⅱ期に比べ口縁の外反および胴上位の屈曲も緩やかである。また内外の轆轤目が明瞭である。

飯は当期にだけ確認でき、66—10、74—11、76—33がある。3個体とも異なる形態であるが、当遺跡を含め武蔵国全体に少ない。それに比べ下総、上総での出土量は極めて多い。この違いはなにが起因しているのであろうか。柿沼氏は小形飯の消滅は木製品の普及と考え、大形飯の消滅は米の取奪で主食の米を常食することが不可能になったことにより、日常的な厨房用具としての地位を失ったとしている(柿沼1976)。しかしこの場合、房総における普遍的な飯との量的な差を説明する必要がある。房総にほとんどない羽釜は、それを説明する材料になるが、羽釜出現までの間が説明できない。おそらく房総では飯を乗せうる丈夫な甕が作られたのに対して、武蔵国では武蔵型の極く薄手の甕が発達したことから見るに、それに見合う飯は須恵器製の重量のある飯よりも、木製品が使用されたと考えられる。

甕は広口甕と大甕がある。広口甕は76—29、83—11があるが、Ⅱ期と比べ口縁が直線的に外傾し

口唇端面が窪む。大甕は76—34・36があり、前者は南比企産・後者は末野産である。南比企産は精緻なつくりで、波状文が4段巡る。末野産も胎土は粗いが精緻なつくりで、Ⅱ期の甕と比較して口唇端面が窪み、広口甕と同じ変化を見ることができる。

土師器

坏は大きく3形態に分けることができる。まず49—9は内面に放射状の暗文を持ち、体部下位で強く屈曲してやや丸底を呈する。次に74—1、77—11・12は口縁が直線的に外傾するが、74—1は大形で厚手である。これらは前段階に系譜を求めるとすれば、85—6があたるであろう。66—4・5、67—2は、口唇が僅かに内彎し、口唇内側が沈線状になる。体部中位は僅かに括れ、下位の屈曲は丸味を持つ。前段階の60—13の系譜を引くと考えられる。

埴は1点だけ49—18があるが、厚手でつくりも悪い。

小形甕は第77号住居跡に良好なセットが見られるが、口唇が短く尖り外反する。

大形甕は59—7、66—11、77—38に代表されるが、口縁上段の横撫でが弱くなり、コの字状口縁が崩れ始める。66—11のようにコの字がさらに崩れ、口唇が尖るもの、第49号住居跡では49—20・22のように体部上位が縦削りで厚手となるものなど、新しい傾向が見られる。

灰釉陶器

49—17、77—29がある。49—17はI—78号窯式と考えられるが、内面が擦られ、甕であろうか転用されている。77—29は高台が低く、K—90号窯式であろう。

○第Ⅳ期

この期の住居は極端に減少する。第4号、78号、95号住居跡のセットが基準となる。器種は須恵器坏、高台付坏、皿、壺、土師器坏、甕がある。

須恵器

坏は78—1、93—1・3のように底径が極端に小さくなり、体部中位が脹らみ、口唇にて強く外反して玉縁状を呈するなどの特徴を持つ。また78—2は厚手で器高の低い形態を呈する。この2種の坏はⅢ期の第77号住居跡に見出すことができ、前者は77—4・7の、後者は77—5の系譜を引くと考えられる。

埴は台耕地遺跡では無高台および高台付埴の系譜が消滅するとともに、坏に高台を付けた埴が出現する。78—5・6、95—1は、78—1に高台を付着したもので、胎土も全く同一である。高台は厚く短かく、つくりが悪い。これらの胎土は夾雑物が少なく、長石・片岩・酸化粒を多量に含む一般的な末野窯跡群の土と異なり、末野の未発見の窯跡あるいは他の窯跡群に求めるべきであろうか特徴ある遺物だけに今後注目すべきであろう。

皿は1点78—7があり、底径が小さく、直線的に開き、口唇が薄く外反するなどの特徴があるが前代からあまり変化していない。

壺は細頸の95—4、広口の4—4・5がある。95—4は灰釉の模倣形態であるが、この時期に各地でつくられている。4—4・5は最大径が胴中位にあり、高台の低い形態である。前者は末野産で口縁部を胴部に乗せるのに対して、後者は南比企産の可能性があり、口縁を差し込み、胴下位を回転寛削りする。

土師器

杯はやや口径が大きく浅い丸底の15—2・3がある。この器形の系譜は台耕地遺跡のⅢ期に見出すことは出来ず、Ⅰ期の73—4・5に求められると思われる。その間を埋める土師器は大久保山遺跡（小川・橋本1980）などにも出土している。

甕は小形甕78—8と大形甕78—10があり、両者ともこの期に減少する。78—8は口縁がやや肥厚し、くの字状になり、削りが口縁屈曲部まで入る。78—10はコの字状口縁が崩れており、口縁上部の横撫でが弱くなる。

○第Ⅴ期

第21号、24号、25号、97号住居跡などがあるが、良好なセット関係はなく、第97号住居跡で須恵器杯と羽釜が相伴しており、上記の4軒の住居跡はほぼ同時期と考えられる。第Ⅳ期からスムーズに移行しないため、空白期間があると考えられる。器種は須恵器が杯、高台付杯、羽釜、土師器は甕がある。

須恵器

杯は24—1、97—1・2があるが、97—1は第Ⅳ期の78—1の系譜を引いている。24—1は切り離しが不明瞭で、底部と体部の屈曲部も丸く、系譜の不明な杯である。97—2は口径に比べ底径が広く、胎土に角閃石、金雲母を含み、焼成は酸化炎で、つくりも土師器的である。中沢悟氏が土師質土器と分類されたのは、この土器にあたると思われるが、中沢氏は須恵器の系譜と考えている（中沢1981）。しかし台耕地遺跡の場合、羽釜が酸化炎にもかかわらず須恵器の土であるが、97—2の杯は土師器的な土であり、系譜についてはさらに検討が必要である。

碗はⅤ期と同様高台付杯になり、24—2、97—3がある。いずれも高台が低く、内面に粘土を張りつけるため斜めになる。

羽釜は25—2・3、97—4・5がある。雲母、片岩を含む例があり、胎土は須恵器であるが、焼成はいずれも酸化炎である。

土師器

甕は小形品が不明で、大形品は21—1・2が確認できた。いずれも器肉は厚く、21—1は内外の整形が不十分で成形時の凹凸を消し去っていない。口縁も同様に、横撫でが不十分のため凹凸が残り、くの字状に立ち上がる。21—2は肥厚する口縁の一部にまで削りが入り、口縁との段差をつくっている。

C 台耕地遺跡への須恵器搬入について

第Ⅰ期において南比企産は小形品のみで、割合は29.2%を占めており、南比企産Ⅰに対して末野産Ⅱの割合である。

第Ⅲ期は南比企産が12.2%で、割合は減少しているが、須恵器個体数は増加している。末野産との比較では1:6.9で、当集落に占める末野産は当期に増大する。酸化炎焼成の須恵器も増加し始めるが、酸化炎焼成品が南比企産にはほとんど見られないことは、末野産が生産地に近い条件のためであろう。杯の切り離しは離し糸切りが多く27例、次いで回し糸切り16例、前引き糸切りは5例と少ない（小川1979）。

第Ⅲ期の南比企産は8.7%で、割合および実数とも減少するが、末野産の実数はほとんど変わらない。南比企産1に対して末野産9.6であり、第Ⅲ期よりもさらに末野産の割合が高くなるが、酸化炭焼成品の割合はそれ程変化しない。第Ⅱ・第Ⅲ期に末野産が増大することは、末野窯跡群の窯の増加、拡大と関わりがあると考えられる。坏の切り離しは離し糸切りが最も多く20例、回し糸切りは16例、前引き糸切りは1例であった。この出土率の差は第Ⅲ期と変わらない。小川貴司氏は糸切り離しの実験などから、関東の須恵器は「前引き糸切り」から「まわし糸切り」へ、そして「離し糸切り」へ、スムーズに展開するとした。その出現時期についてはそれぞれ、8世紀後半代、9世紀前半代、9世紀後半代としている。

第Ⅳ期の出土土器量は住居跡の減少に伴ない激減し、南比企産も1点確認できるだけである。酸化炭焼成の須恵器の割合は増加し、還元炭焼成を上回るようになる。この時期は末野窯跡群が縮小する段階で、須恵器の生産量も減少し、変質化の始まる段階である。

第Ⅴ期も同様出土遺物は少なく、南比企産は見られず、酸化炭焼成の割合はさらに増加する。当遺跡出土と末野窯製品の器種、胎土、焼成、技法などに変革が見られ、中世への過渡的な段階に入ったと考えられる。

D 年代について

5期区分した土器群の年代について触れるのであるが、当遺跡で年代の推定できる遺物は少ないため、他地域の年代観を利用せざるを得ない。このような状況の中で年代の推定できる資料として関東以西からの搬入須恵器、灰陶陶器がある。また武蔵国内で編年作成の定点となっている新久A-1号窯と同形態の坏がある。

第Ⅰ期は48-17の須恵器長頸瓶が年代をさぐる資料となる。同類の壺Gが平城宮、長岡京、平安京などで出土し、その初現は平城宮SK870で平城宮Vの土器群と「左衛土府」の木簡と出土している(小笠原・西1976)。「左衛土府」木簡の年代は天平宝字2(758)年以降に限定でき、共存する平城宮Vの土器群の略年代は780年に置かれるという。下限はSE311Bの遺物で、平城上皇崩御による放棄で、天長2(825)年後の短期間に投入されたものとする。また平城宮SD650Aからも出土し、9世紀前半から870年頃の遺物を含み、中心は9世紀中葉であるという(吉田1975)。

長岡京ではSD51(徳丸・百瀬1976)、N7C地区SD6301上層(高橋1976)、SD6101(高橋1975)SD21(梅川はか1977)などで出土し、長岡京に特徴的な遺物であるという。SD51は文献と花粉分析から、長岡京京都時(延暦13年)に埋められた。平安京では左衛兵衛府SD4から発見されているが、共存遺物として「主馬」の墨書がある(平尾1978)。左右馬寮を天徳元(781)年に主馬寮に統合し大同3(808)年まで存在した宮司だということで、年代の限定できる資料となる。

このように長頸瓶の年代は天平宝字2(758)、年以降、9世紀中葉までの限定された年代が与えられ、長岡京に多くの類例をさがすことができる。長頸瓶の形態にはやや肩の張る太身と細身の2種に分けることができるが、年代差だけでなく、生産地の違いも考えられる。太身の生産地の一つに静岡県四方郡伊豆長岡町花坂島橋窯跡(秋本1976)が知られているが、文献では遠江・駿河・伊豆のいずれも陶器を調納してはいないため、畿内出土の長頸瓶が東海東部産の可能性が高いものの、今後の検討が必要であろう。

関東でも長頸瓶を出土する遺跡はいくつかあり、千葉県市川市須和田遺跡(杉原・小林1971)、同国府台、同権現原遺跡(佐々木1981)、同市営総合運動場内遺跡(宮内1983)、柏市中馬場遺跡(小宮・野村ほか1976)、八千代村上遺跡(天野・千葉ほか1975)、千葉市駒形遺跡(対馬・谷島1978)、茨城県石岡市鹿の子C遺跡(佐藤・川井1983)および埼玉県では行田市原遺跡SD 001(栗原・杉崎1978)行田市愛宕通遺跡6号住居跡、岡部町白山遺跡²⁵などから出土している。市川周辺、鹿の子C遺跡の国府周辺や大形集落に出土することは、畿内で宮跡から出土することと関連し、注目できる資料である。台耕地遺跡に類似する細身は類例が少ないが、市川市営総合運動場内遺跡26号遺構から出土しており、太身と共存している。畿内では平安宮左兵衛府SD 4あるいは長岡京内出土例に類似していることから、長岡京存続期間784～794年の限定した年代を与えることができる。

長頸瓶の出土した第48号住居跡では糸切り後底部周辺削りの坏が出土しているが、前内出1号窯(高橋ほか1974)の製品に、技法・口径とも類似している。前内出1号窯は服部氏、宮氏らの武蔵国分寺創建、国分僧寺七重塔再建段階の須恵器から追った年代は、8世紀第4四半期後半から9世紀第1四半期前半に位置づけられている(服部1983、高橋・宮1983)が、先の長頸瓶の年代からも首肯できる年代である。台耕地遺跡第1期には底部糸切り未調整の坏も含むことから、9世紀第1四半期の年代を与える。

第Ⅱ期の年代をさぐる資料は44-17の灰軸浄瓶、61-6の灰軸瓶がある。44-17の浄瓶は体部が細身の倒卵形で、高台が高く、受口部の皿が丸いことからIG-78号窯式、61-6もIG-78号窯式と考えられる(楠崎1983)。灰軸陶器の年代については今日まで2つの考え方があり、かつて100年以上の年代差があったものが、今日では数10年に縮まっている。楠崎氏は天禄4(973)年焼失の薬師寺西僧房出土資料と平安京左京四条一坊SE 8地点出土の寛治5(1096)年墨書銘を有する須恵器と伴出する白瓷系陶器が東山105号窯式に類似するという2点などから、黒笹14号窯式を9世紀後半代、黒笹90号窯式を10世紀前半代に比定した。また折戸53号窯式は薬師寺西僧房出土の焼失資料の主体が折戸53号窯式であり、焼失年次天禄4(973)年は、その操業期間のうちの中ごろの時期を示すとした。

楠崎氏の年代観から44-17の浄瓶はIG-78窯式でも古い時期、9世紀第2四半期の前半と考えられる。61-6の瓶もほぼ同時期と考えてよい。

須恵器は東金子窯跡群の新久A-1号窯と並行すると考えられる。新久A-1号窯出土の瓦は『続日本紀』にある武蔵国分僧寺塔再建時の瓦で、出土須恵器を記事が伝える承和12(845)年を指標として考えられている。また僅かに古い八坂前4号窯でも同様に再建瓦を焼成していることから、八坂前4号窯を845年から850年、新久A-1号窯を850年以降と考えられている。この年代を援用すれば、台耕地遺跡第Ⅱ期は9世紀第3四半期と考えられる。

第Ⅲ期は搬入土器として灰軸瓶49-17、77-29がある。49-17はIG-78号窯式、77-29はK-90号窯式と考えられる。49-17の瓶は周辺が欠いてあり、内面が擦られて平滑となることから、靱に転用され、伝世した可能性がある。77-29は10世紀前半に位置づけられる。近隣の寄居町沼下遺跡3号住居跡からも、同期に並行する末野産須恵器とともに、K-90号窯式の皿が共存している。須恵器は南多摩窯跡群御殿山25号窯式(G25)、あるいは宮氏が抽出した花園支群第2号窯(SuH2)

と共通する要素を持つが、後者に埴の蓋が多く見られ、窯跡出土品のうち古い形態を取り上げている。両者とも900年以降の年代が与えられているが、SuH2の方がやや遅るであろう。以上の点から第Ⅲ期は10世紀第1四半期と考えられる。

第Ⅳ期は資料が少ないため、セット関係の把握にやや問題が残るが、須恵器の類似資料として新久D-3号窯があげられる。新久D-3号窯について宮氏は、共通様相を持つ製品にK-89・O-53号窯式の灰釉陶器が伴なうという事実から、10世紀第2四半期頃としている。当期の特徴である28-5・6に類似する高台付坏が、近隣の寄居町沼下遺跡第9・13・18・19号住居跡(大和1982a)同中山遺跡1号住居跡(大和1982b)でも出土しているが、やはり高台付坏をほとんど伴わず、土師器コノ字状口縁甕がほとんど消滅している。中山1号住居跡からは羽釜の破片が出土していることから、当期から羽釜の共伴する可能性もあるが、小片で酸化炎焼成、銹部が低いことから混入も考えられ、検討が必要である。坏、高台付坏、土師器甕などを見るならば、第Ⅲ期と僅かな開きがあり、10世紀中葉の年代を与えたい。

第Ⅴ期は羽釜、土師質坏の出現が基準となる。羽釜の出現については坂本和俊氏が11世紀前半(坂本1973)、高橋一夫氏が9世紀後半(高橋1975)、市川修氏が10世紀前半(市川1977)、中村倉司氏が11世紀前半(中村1980)、中沢悟氏が10世紀前半(中沢1981)の年代を与えられている。灰釉陶器、須恵器の年代のとりえ方で、各氏の年代観に違いが見られる。中沢氏は第3期から羽釜が出現し、いずれも還元炎焼成で、羽釜全体に丸味を持つ特徴を上げられた。台耕地遺跡の羽釜は還元炎・酸化炎の混在する焼成で、形態も中沢氏の第4期に含まれると推考できる。中沢氏の第4期の編年基準は土師質土器の出現であるが、台耕地遺跡でも第99号住居跡から羽釜と共伴している(97-2)。以上から台耕地遺跡第Ⅴ期は中沢氏の第4期に並行するであろう。中沢氏はその年代を10世紀後半に置いているが、同期に伴なう灰釉陶器は美濃大原2号窯式で、後半には虎溪1号窯式と思われる製品が入って来るといふ。中沢氏の第3期も大原2号窯式が主体を占めているようである。大原2号窯式は猿投の折戸53窯式に並行しており(齊藤1981)、同窯式は楢崎・齊藤編年では10世紀後半代、吉田恵二氏は10世紀末に一端を置いている(吉田1982)、中沢氏の第3期は灰釉と

第4表 台耕地遺跡土器編年

	台耕地遺跡	窯跡
800	第Ⅰ期	前内出1号窯
	+	八坂前4号窯
900	第Ⅱ期	新久A-1号窯
	+	花園支群2号窯
1000	第Ⅳ期	新久D-3号窯
	+	
	第Ⅴ期	

の共伴関係から10世紀後半代とすることも可能であろう。しかし中沢氏が第3期と共通するという観音山古墳周溝中の土壇出土の須恵器が、貞観永宝(870年初鈔)、寛平大宝(890年初鈔)と共伴することは、看過できない事実であり、今後さらに検討が必要であろう。台耕地遺跡第Ⅳ期と第Ⅴ期は連続せず、1型式ほどの間が開くようであれば、10世紀第4四半期に置きたい。

2) 住居跡について

(1) 集落の変遷について

平安期58軒の住居跡は3つの段丘にわたり分布するが、同時期に存在したのではなく、土器から5期に分けることができた。集落はすべて完掘できたと思えず、東西への拡がりも予測できる。しかし集落は緩やかな拡がりを示しており、集落構成を考える上に問題はあつたものの、ある程度の全体像をつかめると考えている。

集落の時期別分布

台耕地遺跡の住居跡は下から第1段丘面に1軒、第2段丘面には段丘斜面から離れて、北東に張り出すやや高い地点に多く存在する。しかしこれは五領期が多く、平安期は全体に広がり、南西方向では未発掘部分もあるものの、住居間隔が開く。第3段丘面では、段丘傾斜面に寄り、ある程度の集中が見られるが、後に述べるように製鉄炉を中心に構成された住居群であらう。

平安時代の土器群を5期に区分したものの、土器群の年代幅は数10年あり、土器群から区分した住居群は、住居の耐久年数からも同時存続は考えられず、第2・第3期の土器群の中にも古相・新相を含むことから、建て変えの前後があつたと考えられる。住居の変遷からは、台耕地遺跡の各段丘に渡る集落構成の変遷と、台耕地遺跡での特色である製鉄関連の集落を導き出すことが目的である。

○第Ⅰ期

当遺跡の平安時代の集落は当期から始まり、該当する住居跡は第13・48・50・52・73号住居跡の5軒である。

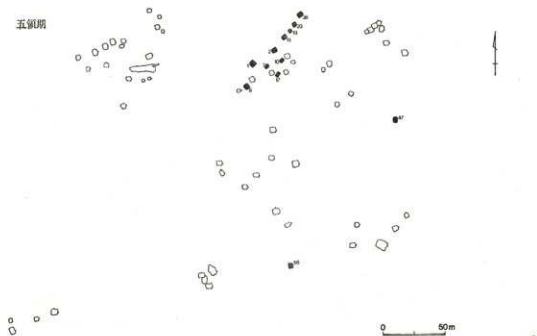
第48・50号住居跡は近接するが、他は距離があり、東の未掘部へも続くと考えられるが、いずれも第2段丘上につくられる。第48号住居跡は竈が造り変えられており、時間的な長さを感じさせる。第73号住居跡では羽片(73-13)と鉄滓付着土器(73-7)が出土しており、第48・50号住居跡の多量の鉄滓の出土とともに問題となるが、第49号住居跡からの混入の可能性もある。後に述べるように当期にはまだ製鉄作業が始まっていなかったと考えられる。

○第Ⅱ期

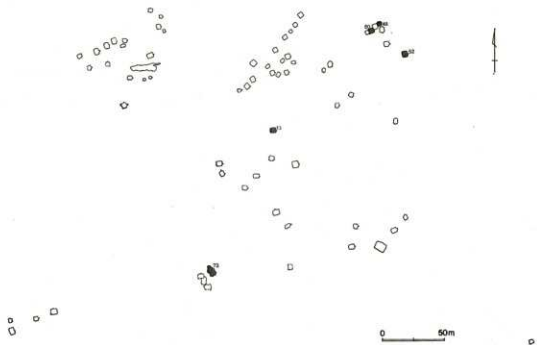
第Ⅰ期との間には空白期があると考えられる。

当期に該当する住居は第6・8・9・23・43・44・57・60・61・62・64・65・72・79・80・81・85・86・87・89・90・91・92・94・96号住居跡の25軒で、平安時代で最も多い時期である。住居跡群はA群～H群に分けることが可能であり、各群はおよそ60m近い距離を置いている。第2・第3段丘に分布しているが、製鉄炉のどれか(第3号炉と考えられる)が稼働し始めた段階と考えられそれに伴ない第3段丘上の各住居跡(A群)はつくられたと推測できる。このほか第2段丘上では第8号住居跡が中央に精錬炉を持ち、また第44号住居跡が銅印鋳型と鉄鋏を持つなど、工房跡が出現するようである。また第2段丘上では第57・64・72号住居跡、第3段丘では第79・81・87・94号住居跡などが鉄滓を多く出土しており、製鉄作業になんらか関与した可能性があるなど、台耕地遺跡の集落拡大は製鉄作業に関連したためと考えられる。H群についてはG群の西140mにあり、H

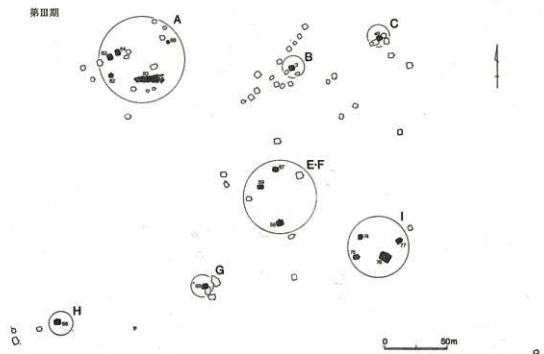
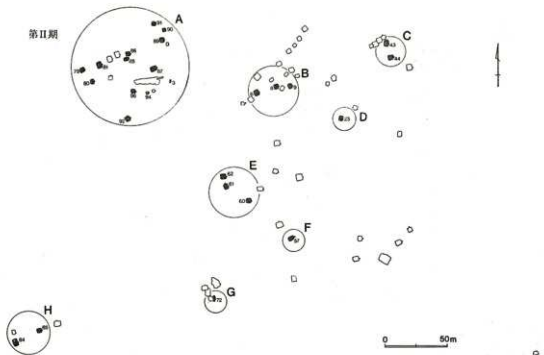
五領期



第I期

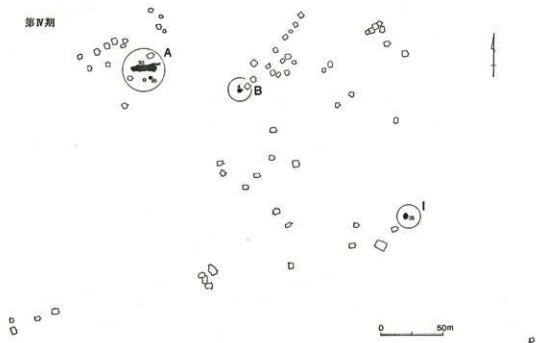


第202図 時期別住居跡分布図(1)

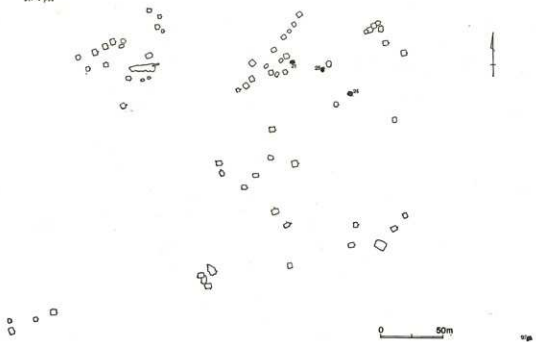


第203圖 時期別住居跡分布圖(2)

第Ⅳ期



第Ⅴ期



第204圖 時期別住居跡分布圖(3)

群の北の段丘斜面には鉄滓が多量に出土しており、製錬炉の存在が予測できることから、この製錬に伴ってH群が構成されたと考えられる。

○第Ⅲ期

当期に属するのは第3・49・58・59・66・67・69・74・76・77・82・83・84・88・93号の各住居跡であり、総数15軒を数える。第Ⅱ期よりいくぶん減少するが、第2・第3段丘に広がりを見せる。第3段丘上では第2製錬炉が稼働し、第93号住居跡（工房跡）あるいはA群の住居跡群と関連して、製鉄作業が行なわれたと考えられる。第2段丘上ではB群に1、C群に1、E・F群に3、G群に1、H群に1など第Ⅱ期とほぼ同地点につくられているようであるが、新しくI群として4軒がつくられている。各群はⅡ期より間隔を置いて、およそ80m離れて存在している。H群はⅡ期と同様その北にある製錬炉と関連を持つであろう。第49号住居跡から銅印鉤型・小銅塊・砂鉄容器裏片が出土するなど、鉄以外に銅製品製作に携わったことがわかる。第58・75・76・77・83・88号住居跡などで鉄滓の出土量が多いが、明確に鉄生産に携わった住居か判断できない。しかし各住居からの多くの鉄滓出土量は、当期まで製鉄作業が活発に行なわれ、各住居跡がなんらかの関わりを持ったと推測できる。

○第Ⅳ期

当期に属する住居は第4・78・93・95号住居跡であり、極端に減少する。A群に2、B群に1、I群に1が分布するが、第93号住居跡は工房跡であり第Ⅲ期から存続する。第93号住居跡から投げ込まれた多量の羽口が、第Ⅲ期の第96号住居跡覆土中層から検出されており、第Ⅲ期を主体とする工房跡と考えられる。また第95号住居跡は鉄滓の堆積した土層を切り込んでつくられていることから、第Ⅲ期までが製鉄作業が行なわれた時期と考えられ、当期の集落規模の縮小化は、製鉄作業の終焉のためであろう。

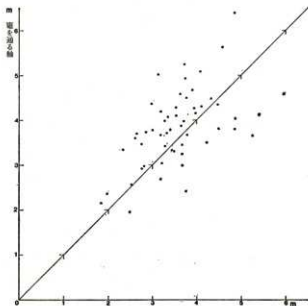
○第Ⅴ期

第Ⅳ期との間には1期から2期の空白期があると考えられる。

当期に属する住居は第Ⅳ期と同様第21・24・25・97号住居跡の4軒である。竈方向は他期とやや異なり、第25号住居跡のように南につくられるもの、第97号住居跡のように無いと考えられるものがある。第21・24・25号住居跡はB・D群の範囲にあり、第97号住居跡は第1段丘にただ1軒だけ、風を避けるように古墳の南東陰につくられている。当期は製鉄作業と関わりなくつくられた住居跡群である。

(2) 住居跡の規模について

台耕地遺跡で最小の住居跡は第94号住居跡の2.1×1.85mで、最大は第58号住居跡の4.6×6.0mであるが、多くの住居跡は一辺3～4.5mの規模である。平面形態は長方形が多く、竈の付設される位置は長方形の短辺側に多い傾向はあり、割合は長辺側の約2倍である。特に小形の住居跡は第4・88・94・95号住居跡のうち第4号住居跡がB群で、あとはA群に属し、第88・94号住居跡から多くの鉄滓を、第4号住居跡から鉄滓および羽口・炉壁片を出土していることから、生活住居でなく製鉄作業に関する住居跡と考えられる。



第205図 住居の規模

住居跡の規模について真間期以降縮小化する原因を、古代国家の取奪による考え（和島・金井塚1966）があったが、笹森健一氏は支脚の検討から竈の位置を導き、鬼高期の土間（柱穴内）としたものは、国分期の竈穴の面積を表わしているとした。そして国分期の柱穴の欠除も竈穴外にあると想定して、住居範囲を竈穴より外に広がるとした（笹森1978）。柿沼幹夫氏は竈の導入は竈穴内に「土間」（笹森氏とやや異なり竈一貯蔵穴—入口を結ぶ線）の明確化をもたらした。それが発展して「土間」のみが竈穴化され、「居間」部分は

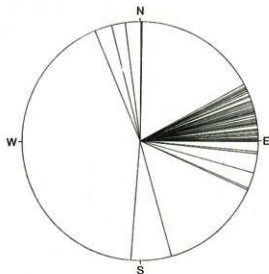
平地化した。あるいは機能的分棟がなされてカマヤのみが竈穴となったと考えられた（柿沼1979）。

台耕地遺跡では住居外の柱穴あるいは平地住居部分については、発掘時の土層などの制約もあり検出できなかったが両氏の考えを受け入れるには疑問な点がある。一つは斜面につくられた住居の場合である。近隣の沼下遺跡では竈は斜面下方の東方向に引き、やはり当地域の風向きの影響を受けたと考えられる。この住居の場合、笹森氏の考え方で見るならば、竈の反対側、つまり斜面上方にも平地部分が広がるということになる。ところが沼下遺跡の場合、竈の反対側の壁高は残りのよいもので0.7~0.96mの高さがあり、壁の立ち上がった外側の斜面上方は、なんら平坦部は作られず、地表と同様急傾斜面をつくる。竈の左右側の北壁、南壁にも平坦面らしきものは見られない。竈を斜面上方に設ける住居も見られるが、この場合も竈の反対側に盛土をしなければ平坦面は形成できず、そのような痕跡も検出されていない。このような傾斜面の住居跡は台耕地遺跡では第95号住居跡が該当するが、同様に傾斜上面下面いずれにも平坦面は見られない。

2つ目は切り合いのある住居跡である。切り合い住居跡の場合、壁の一部が古い住居の覆土になるわけであり、笹森氏のいう平坦部分は覆土上面につくられる場合もあったと考えられる。この場合、古い住居跡の覆土上に貼り床などを形成すると予測できるが、今日まで発見された例はない。また柱穴も住居外に明確に検出された例を知らない。

次に茨城県鹿の子C遺跡から検討してみたい。鹿の子C遺跡は方位の一定した住居が整然とつくられる、計画的な集落である。時期差はあるにせよ住居間は近接しており、笹森氏の平地部分が住居覆土中には見られない。また住居跡に4本柱穴の例が多いこと、当遺跡の特徴である連房式竈穴遺構の幅が、一般的な住居跡の一辺と変わらないこと、同遺構の竈の間隔は竈穴住居の一辺と近似していることから、やはり竈穴部分が本来的な住居跡の範囲であろう。

以上から笹森氏らの考え方で納得できない部分があるが、柿沼氏の機能的分棟がなされてカマヤ



第206図 住居跡主軸（竈を通る軸）方位

る。

竈の方位に時期的な違いはほとんど見られないが、第Ⅴ期に含まれる第21・23・25号住居跡は、やや南に偏るようである。

当遺跡で竈が東に偏る原因は何に求められるであろう。最も可能性の高いものとして風向きが考えられるが、これは当遺跡以北のいくつかの遺跡で確認できる。当地域の冬期には北西方向の強風が吹くため、風を避けて90°東へ偏り竈をつくったと推測できる。

3) 製鉄関連遺構について

当遺跡には3基の製鉄炉が存在するが、住居跡からも製鉄関連遺物が出土するなど、製鉄炉と集落が有機的な関係をもってつづられている。しかし製鉄作業に直接関与した住居か判断は不明確であるため検討してみた。

(1) 製鉄炉

製鉄炉は21・22—マ区の第2段丘から第3段丘へ上がる緩斜面に、3基並列してつくられている。第2図の等高線を見るとそのあり方が分かるが、製鉄炉南西の未発掘部の同一段丘傾斜面にも鉄滓の分布するところがあり、同じように緩斜面となる。ここにも製鉄炉の存在を考えている。

製鉄炉は東から1・3・2号と並ぶが、周辺出土の土器を見るに台耕地遺跡第Ⅱ期から第Ⅲ期、9世紀第3四半期から10世紀第1四半期にかけて稼動したと考えられる。炉の形態は円筒形シャフト炉（穴沢1981）あるいは半地下式整形炉（土佐1981）と呼ばれる奈良・平安時代に関東を中心として、一般的に見られる形態である。関東の製鉄炉を検討した阿久津久氏は、立地について「1. 丘陵の裾部台地を利用、2. 洪積台地の斜面部、3. 河岸段丘の斜面部」に分類され、炉は「a. 斜面の中間をテラス状に掘り込む、b. 斜面の下部の緩斜面部分を整地する、c. 平坦部を掘り込

のみが堅穴となったという考えには賛成できない。両氏の考え方は注目できる見解なので、今後考え方のみ先行せず実証例を増加して検討することが必要である。

(3) 竈方位について

台耕地遺跡の住居跡の竈は圧倒的にN—62°—E～N—90°—Eの間に集中している。次に北から西に偏った方向が多いが、これは同一住居跡で北に竈を作り変えたものを含んでいるためである。最初から北に竈をつくる住居は第58・69・78・82・91号住居跡である。またN—90°—Eより南に偏る住居跡は第21・23・24・25・42・67・71号住居跡があ

み、斜面を形成する、d. 緩斜面を階段上にテラスを設置する」などに分類された。その中で花園1号遺跡(台耕地遺跡)を3-dに分類され、「炉を並列することができ、作業場の確保の容易であるのが特長」とした(阿久津1982a)。

台耕地遺跡の炉で最も残りがよいのは第3号炉で、炉上方の壁が全周残っていたものの、炉前下部の壁は破壊されていたため、大形羽口の設置など、構造については不明確である。また炉背部の小形羽口設置については切断して確認したものの、検出できなかった。

炉は礫層に掘られているため、粘土で壁の構築をしているのであるが、現高の炉の中位まで行なうだけである。また第2号・3号炉内の土層が前庭部と連なっており、その高さまでしか溶壁が見られないことから、本来炉底は現高の中位かやや下であろう。その下位の庭部まで続く土層は防湿のため、掘り方の上に敷かれた土であろう。

(2) 工房跡

工房跡と明確に判断できる遺構は炉の設置された第8号住居跡だけである。しかし出土遺物、鉄滓などの分析から第44号、49号、87号、93号住居跡などが、可能性が高い。これらの遺構を含め、鉄滓、鉄滓付着土器、炉壁、羽口、鉄器の出土状況を表にして、製錬炉と集落のかかわりについて検討してみたい。

A 遺構

第8号住居跡中央から炉が検出されているが、炉は土坑の一端につくられ、長径約0.9mの不整楕円形である。炉の一端には羽口が設置された状況であろうか、水平に出土した。炉に接するように土坑が掘られているが、礫石、羽口など製鉄関係の遺物とともに、多量の石が検出された。この土坑は竈に近接しすぎること、土層が床面と水平となることから、炉を使用している時は埋められていた遺構で、炉の防湿のために掘られた土坑と考えられる。大沢氏の分析にもあるように、当遺構は精錬鍛冶(大鍛冶)と考えられる。

第93号住居跡は、形態から住居跡とは判断できないが、3~4の浅い掘り込みが連なった細長い遺構となっている。それぞれの浅い掘り込みは、東から西へ順次つくられているようであるが明確ではない。防湿のためか、粘土に近い土が敷かれていること、第2号製錬炉に近接しており、獸脚鈎造品および鈎型が検出されたことから、工房跡の可能性が高い。後にも触れるが、直接製錬炉から鈎造したことから、近接した当遺構は工房としては最適な位置にあったと考えられる。

B 遺物

製鉄関係の遺物が多いが鉄滓、鉄滓付着土器、羽口、炉壁、金属製品について触れてみる。

鉄滓は第2・第3段丘面いたるところから出土するが、Ⅰ区では44.72kg、Ⅱ区22.65kg、Ⅳ区17.28kg、Ⅴ区5.53kgで、総重量90.17kgであった。この中に製錬炉を含まず、発掘調査時遺構確認まで重機を使ったため、やや少ない感もある。遺構内で最も多く出土したのは第44号住居跡の14.31kg、続いて第8号住居跡の12.03kgであり、両遺構は工房跡と考えられる。さらに第72号住居跡が7.73kg、第87号住居跡が4.24kgで、第48・49・50・57・58・64・76・93号住居跡も多く出土する。これらの中には床面上に塊で置かれていた状況がうかがえるものがあり、第8・49・58・61・71・

第5表 住居跡出土製鉄関連遺物表

住居跡	時期	鉄滓(g)	鉄滓付着土器	羽口	炉壁	鉄器	住居跡	時期	鉄滓(g)	鉄滓付着土器	羽口	炉壁	鉄器
3	III				○	錐	70						
4	IV	410	○	○	○		72	I	7730				板状
6	I	80				棒状	73	I	50	2	○	○	
8	I	12031	○	○	5	棒状	74	III	350	2	○	○	釘
9	I	20					75	III	570		○	○	
13	I	295		○			76	III	2375	2	○	○	
21	V						77	III	585	○	○	多	
23	I						78	IV	460				
24	V						79	I	950	○			
25	V						80	I	60				
43	I	170				鉄鏝 2	81	I	560				棒状
44	I	14305		○	○	鉄鏝	82	III					
48	I	2895		○			83	III	845	3	○		
49	III	2170	○砂鉄	○	○	錐・鉄鏝 鈎鉄片など	84	III	270	4	○	○	釘
50	I	1295				板状・棒状 鏝	85	I	130	2	○	○	
52	I						86	I					
57	I	1055					87	I	4235	2	○		鏝・鉄片
58	III	1910		○		板状	88	III	590	1	○		
59	III			○			89	I	160				
60	I	15		○			90	I					
61	I	235					91	I					
62	I	200			3		92	I					
64	I	2350	○砂鉄				93	III	1475	6+砂鉄	○	多	撒御・鏝・鉄鏝 鈎鉄片など
65	I						94	I	975				
66	III	390	○		○		95	IV					
67	III						96	I	75	○	○	多	釘
68			245				97	V					
69	III	250											

79・81・82・94号住居跡で確認できた。住居跡出土の鉄滓の中には大沢氏の分析のように、破碎された製錬滓が多く、第8号住居跡の精錬鍛冶滓、第44号住居跡の鍛錬鍛冶滓が含まれている。

鉄滓付着土器は破片、あるいは使用中の土器にしろ、操業時に炉の脇にあったため、鉄滓の飛沫が付着したものであり、土器の移動がなければ、出土した住居跡内で鉄の熔解が行なわれた証拠となるであろう。出土する住居跡は4・8・58・59・64・66・73・74・76・77・83・84・85・87・88・93・96号などの住居跡がある。しかし炉が明確に確認できたのは第8号住居跡だけである。当遺跡が砂礫層に構成された集落であり、床面を確認するのも困難であった状況を考慮するならばあるいは他に炉があった可能性もある。ここで問題となるのは大沢氏の分析した第8号住居跡出土の要付着鉄滓が製錬滓という結果の出たことである。各住居跡出土の鉄滓付着土器も、多くは肉眼的に第8号住居例と同様な状況を示している。製錬炉付近で付着したということになれば、当遺跡の数少ない接合関係の中にも140m(76-19・21・32・36など)、120m(9-5)間の接合があったことから、鉄滓に混入して製錬炉付近から一元的に運び込まれたと解釈するのが妥当であろうか。あるいは第66号住居跡-1がほぼ完形の坏で、鉄滓が広く付着し、第8号住居跡の分析資料と異にす

る状況であることから、当遺跡で他に精錬炉の存在を考慮すべきか問題である。飛沫して付着したとする製錬炉付近にその資料が少ないことから後者の可能性が高いと考えられるが、今後の分析資料の増加を待ちたい。

鉄滓付着土器のほか砂鉄の付着した例があり、第49号住居跡からは須恵器甕(49-25)内面に、第64号住居跡からは須恵器甕(64-7)口縁に、第93号住居跡からは須恵器高台付埴(93-19)が出土した。49-25は大沢氏の分析によれば、第1号製錬炉の砂鉄と類似することから、砂鉄容器と考えられる。64-7も同様と考えられるが、台耕地遺跡ではこの他第44・76号住居跡から大甕が出土するが、砂鉄容器の可能性が高く、砂鉄を住居内に貯蔵したものであろう。93-19は工房跡出土であり、付着状況から砂鉄層に埋っていたと考えられる。

羽口は大山遺跡のような大形品はなく、第8・49・62・73・77・92・93・96号住居跡から完形に近いものが出土するほか、いくつかの住居跡で小破片が検出された。第8号住居跡では炉に設置された状態で、第62号住居跡は小さな土坑(焼けていたか不明確)に、あたかも設置状況を示すかのように出土した。第62号住居跡は鉄滓が200gと少ないため、はたして使用状況を示すのか疑問である。工房跡と考えられる第93号住居跡からは1点だけであるが、その下方に立地する第96号住居跡覆土中からは、第93号住居跡から投げ込まれたと思われる状況で約50点出土した。大きさは外径が7.1~8.9cm、孔径が2.15~2.5cmである。胎土・つくりとも類似するが、形態にやや違いが見られ、3種に分類できる。1はほぼ一定した太さの96-5、2は中位がやや括れて基部が太くなる96-8・9・10・14、3は基部がやや細くなる96-11・12・15などである。形態の類別は他の住居跡でも共通し、第2号製錬炉でも同類で大きさも近似していた。いずれの羽口も送風装置をソケット状に差し込んだため、基部の孔が摩滅している。また口部が融解して黒色ガラス化し、その周辺に赤褐色の鉄滓が薄く、あるいは垂れ下がるように付着する共通点を持つなど、製錬炉・精錬炉での羽口の区別は見い出せない。

炉壁もいくつか出土するが、住居跡内に設置された状況を示すものはなく、いずれも破片である。表面は融解し、内側は多量のササが入る。第4号住居跡では甕の袖に使うなど、小片であることも含め、鉄滓とともに混入した可能性が高い。

鉄器は製鉄工具として鉄鉄44-20、農具として鋤3-8・49-29、鎌52-4・87-17・93-20、武器として鉄鎌43-9・43-10・49-30・93-23、釘が74-14・84-11・96-4・|T-7・V表採-7のほか棒状、板状などの鉄製品があり、総数51点出土した。後に述べる鋳造品以外は、大沢氏の分析で49-30(鉄鎌)の原料が砂鉄であることが分かったものの、当遺跡で製造したと断言できる資料はないが、44-20の鉄鉄は注目できる。第44号住居跡は第49号住居跡と同様印章鈎型(44-19)を出土し、砂鉄容器と推定できる大甕(44-21)を出土するなど、製鉄あるいは鈎鋼作業に関わった住居跡と考えられる。

当遺跡では鈎鉄製品の出土が目目されるが、獸脚あるいはそれに類するものとして93-21、|T-27・51、|V T-8、それらの胴部と考えられる49-31・32、50-22、93-25、|V T-7が出土する。これらは鼎形の香炉かあるいは修験道で使うような湯釜(蔵田ほか1967)と思われるが、いずれにしろ仏具の鋳造品と考えられ、寺院との関わりの深いことが想定できる。

鉄製品製造工場の一つに第93号住居跡が想定できるが、同住居跡からは鉄脚、鉄製品の胴部の他、鉄鎌、鎌、刀子状の鉄器、砂鉄付着塊の他、当遺跡唯一の鉄脚鉤型が出土している。93-17は断面三角形で、まさに93-21の鉄脚の鉤型と想定できる。また93-18は断面五角形で | T-27の鉄脚に近いことを思えば、本来の形態に近いと考えられる。この他 | T-8が断面円形であることは、鉄脚にバラエティーがあったものか、他の用途を考えるべきか検討が必要である。断面五角形の鉄脚鉤型は累下大山遺跡、猿貝北遺跡、千葉県柏市花前製鉄遺跡（鈴木1982）でも製鉄炉周辺から検出され、第93号住居跡が第2号製鉄炉と近接していることから、同様な出土状況を示している。

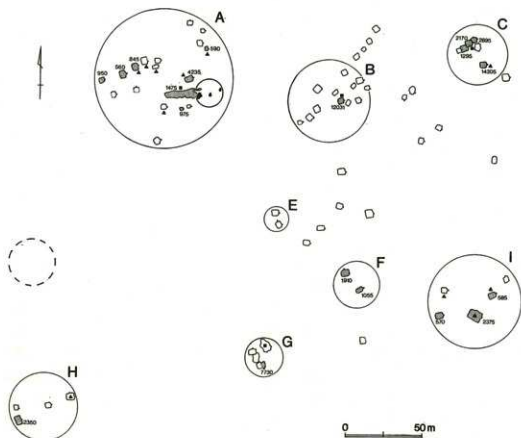
93-25、| T-27、| T-8を大沢氏に試料提供したが、分析結果は砂鉄による鉄で鋳造品と考えられた。このように堅炉（製鉄炉）から高温還元により鉄鉄を取り出し鋳造する一貫工程が推定できることは、注目できる結果である。その工場は第93号住居跡が該当する。

当遺跡では鋳造品は第49号、50号住居跡、各トレンチから出土するが、製鉄炉から直接鋳造したとすれば、炉付近からの搬入品と考えざるを得ない。

印章鉤型は第44号・49号住居跡で出土するが、図示した以外小片が10点近く出土している。両住居跡出土品はいずれも砂型で、印面部の鉤型が確認できただけである。印面に当たる部分は方形と考えられ、周縁は僅かな高まりを持っている。この高まりは鈕部を形成する鉤型と組合わせる接合部と考えられるが、摩耗が著しく正確な高さは不明で、49-34は特に低く、印面の文字と同高である。千葉市谷津遺跡では印面部および鶏頭鈕の鉤型が出土している。鈕部分は2つの合せ型で、印面部と合せて3つで構成されている。鈕頂部の小穴から鉤込んだと推定されており、印面の大きさも3.2cm、4.2cmなどがあり、台耕地遺跡と同巧である。

49-34には文字が残り、掻き彫りによって彫られたもので、極く細で「真」か「直」とみられる。一字とするならば2.5cm方形と推定できるが、文字の左右間隔から上下を推し量るならば、「真」にするとやや縦長となり、「直」と考えられる。上方の外郭が丸味を持たず延びることは、あるいは4字の可能性もある。4字とすれば一辺4.5cm前後（一寸五分）の大きさとなるであろう。49-1-35の印面は3.2~3.5cmで、およそ一寸の規格につくられたものであろう。官印については小形のものとして諸国印で方二寸となり、「公印」については僧綱印・寺院印・神社印・国倉印が方二寸郡印・軍団印・郷印はこれより小さいという。「私印」は寸法の上限を貞観10年太政官府で「但一寸五分以為其限」と定められていた。多くの銅印を出土した男体山頂遺跡出土品にも私印が含まれているが、一寸五分以下を測る。また一字は「澤」と未詳字があるが、ほぼ一寸の大きさである（大和久ほか1979）。その他山王庵寺跡出土の印章も「酒」一字で一辺3cm弱の私印と考えられている（飯塚1979）。45-35は大きさから私印と考えられるが、文字のある49-34は一字とすれば現存例から小さすぎ、4字とすれば一考を要す印となろう。「直」とすれば「□□直印」となり、郡司クラスを想定できるが、類例もなく今後検討が必要であろう。

第49号住居跡からは銅粒（49-36）が出土したが、大沢氏の分析でほぼ純銅に近く、官印が銅と錫の合金であることから、合金前の銅粒と考えることが出来る。銅鋳作業を第49号住居跡内で行なった証左となろうが、残念ながら遺構は未確認である。



第207図 製鉄関連遺物出土状況（数字は鉄滓出土量 (g) ）。四角は鉄滓付着土器・羽口・炉壁を出土する住居跡、三角はいずれか2種を出土する住居跡

以上述べたように、工房跡と明確に断定できるのは第8号・44号・49号・93号住居跡であった。続いて可能性が高いもので第58号・62号・64号・76号・87号住居跡などがあげられる。

(3) 製鉄関連集落

台耕地遺跡第Ⅱ期、第Ⅲ期の集落の成立は、製鍊炉を中心とする製鉄作業（砂鉄採集など製鉄工程すべてに関連）のために構成された集落と考えられる。その集落の配置は製鍊炉を中心とした第3段丘面に広がるA群、第2段丘へ降りて製鍊炉から東へ約80m離れるB群、同方向へ170~180m離れるC群、南東へ90mのE群、150mのF群、同方向220m離れるI群、南々東へ170mのG群が存在する。また集落南西部に位置するH群は、第1~3号製鍊炉との関わりでなく、H群の北約70m付近に位置する未発掘の製鍊炉との関連で構成されている集落だと考えられる。

A群の集落は炉に近接し、背面に構成されており、大山遺跡、柏市花前遺跡、茨城県八千代町尾崎前山遺跡（阿久津1982b）でも見られるように、一般的なあり方と考えられる。多くの製鍊炉が台地斜面に構築されるため、斜面下方は遺構が存在しない例がほとんどであるのに対して、台耕地遺跡では下方の第2段丘面に製鉄関連の集落を形成するという、際立った違いを見せている。

第2段丘に分布するB・C・E・F・G・I群は、50～80mの間隔を置いて存在するなど、特色ある広がりを見せている。I群に関しては第Ⅲ期に開始されるなど、製鉄炉を中心として広がるあり方と違っている。これは大鍛冶、小鍛冶のあり方が、広範囲に広がるのが認識でき、注目すべきあり方ではないかと考えられる。このような小住居跡群の散存化を高橋一夫氏は、宅地的なものが出現し、それにより居住空間が広がったためだと解釈した(高橋1983b)。そのような解釈が成り立つならば、古い段階の製鉄集落が、官的な性格を帯びて集中していたものが、台耕地遺跡の段階に至り集落の広がりを見るとともに、より中世的な鋳物師、あるいは鍛冶工として分散する端緒のあり方と見ることもできよう。そして製鉄炉に近接するA群と分散する他群が共存するあり方を、台耕地遺跡の特色とすることができる。

網野善彦氏は「延喜式」で木工寮に鍛冶戸が属し、刀子、鋸、釘などの鍛造を行ない、内匠寮に鋳工が属し、鏡や内印・外印を鋳造することについて、「鋳工と鍛工とは明確に区別されており、両者は古来別系統の技術であったことは間違いないが、令制施行の当初に両者がともに鍛冶司に属していた事実には、目を向けておかななくてはならない。これが鍛造・鋳造の未分離の状況を示しているのか、あるいは官司の組織の未成熟によるのかについては、なお検討すべき余地が多少とも残っている」とした。さらに中世においては「鉄鋳物師と銅鋳物師の未分化の状況は、(中略)中世を通じて変化なくつづき、近世においても同様であった」とした(網野1983)。

台耕地遺跡では第44号住居跡から鍛錬鍛冶滓とともに印章鋳型が、第49号住居跡からは砂鉄貯蔵容器と印章鋳型を、第93号住居跡では鋳鉄品とその鋳型を出土するが、いずれも関連を持ち、鍛造鋳造あるいは鋳鋼が未分化の状況で行なわれていたと考えてよい。

4 おわりに —特に製鉄集落の成立について—

台耕地遺跡で特色ある製鉄炉と関連集落は、第Ⅱ～第Ⅲ期、9世紀第3四半期から10世紀第1四半期にかけて継続されたと考えられる。出土遺物の中で特徴としてあげられるものは第44・49号住居跡の印章鋳型と第93号住居跡の獸脚類である。前者は郡司クラスまで含めた有力層との関連が、後者は仏具と解釈できることから、寺院との関わりが推測できる。近隣には馬騎の内庵寺などが存在するがこのような寺院と関連を持った地方有力層が関与していたと考えられる。

当集落は第Ⅰ期、Ⅳ期、Ⅴ期とも数軒であるのに対して、第Ⅱ期、Ⅲ期に増加する原因は、製鉄集落の形成と考えられる。このような製鉄集落は官的、公的ではなく、地方有力層による私的な鉄生産、鋳鉄・鋳鋼生産のために成立した計画村落と推測できよう。

註

- 1 今関久夫氏の御好意により実見。
- 2 小形品も含め、片岩が少なく長石粒の多いものの中には、末野から児玉にかけての黒跡群の可能性もある。
- 3 重機で遺構確認面まで掘平したためやや少ないようである。
- 4 1983年埼玉県埋蔵文化財調査事業団発掘。
- 5 遺跡調査会発掘。中村倉司氏より御教授いただいた。底部周辺範囲の坏と共存しており、台耕地遺跡例とはほぼ同時期と考えられる。

- 6 1981・82年埼玉県埋蔵文化財調査事業団発掘。
 7 村田六郎太氏の御好意で実見し、種々の御教授をいただいた。
 8 広範囲の発掘にもかかわらず、炭灰が検出されていない。なお製鉄に使用された炭は径2.5cm前後で、付帯2の分析のようにタヌキが多いようである。

引用・参考文献

- 阿久津久(1982 a)「関東の製鉄跡」『古代日本の鉄と社会』 平凡社
 阿久津久(1982 b)「尾崎前山遺跡の発掘の概要」『同上』
 秋本真澄(1976)「伊豆長岡町花坂島橋窯址発掘調査報告」『靱豆の遺跡研究』(2) 加藤学園沼津女子高等学校 校郷土研究部
 浅野晴樹(1980)「埼玉県出土の平安末期の施釉陶器」『研究紀要』2 埼玉県立歴史資料館
 浅野晴樹ほか(1980)「埼玉における古代窯業の発達(2)」『研究紀要』2 埼玉県立歴史資料館
 穴沢義功(1981)「製鉄遺跡にみる四つの流れ」『歴史公論』66 雄山閣
 天野努・千葉健造ほか(1975)『八千代村上遺跡群』日本住宅公団東京支所
 網野善彦(1983)「中世の鉄器生産と流通」『講座・日本技術の社会史』5(採鉱と冶金) 日本評論社
 飯塚誠ほか(1979)『山王廃寺跡第5次発掘調査報告書』前橋市教育委員会
 石岡憲雄ほか(1979)「埼玉における古代窯業の発達(1)」『研究紀要』1 埼玉県立歴史資料館
 石岡憲雄・浅野晴樹(1981)「出土遺物について」『六反田』大里郡岡部町六反田遺跡調査会
 市川修(1977)「結語」『田中前遺跡』埼玉県遺跡調査会報告書第32集
 梅川光隆ほか(1977)「長岡京跡発掘調査報告」『京都市埋蔵文化財研究所調査報告Ⅱ』京都市埋蔵文化財研究所
 梅沢太久夫・石岡憲雄ほか『六反田』大里郡岡部町六反田遺跡調査会
 大和久彌平ほか(1979)『日光市史』上巻 日光市
 小笠原好彦・西弘壽(1976)「土器」『平城宮発掘調査報告』Ⅶ 奈良国立文化財研究所
 小川貴司(1979)「回転糸切り技法の展開」『考古学研究』101 考古学研究会
 小川貴司・橋本博文(1980)「土器の分類と編年」『大久保山Ⅰ』早稲田大学出版部
 柿沼幹夫(1976)「甎形土器に関する一考察—南関東地方出土例を中心として」『埼玉考古』15 埼玉考古学会
 柿沼幹夫(1979)「住居跡について」『下田・諏訪』埼玉県遺跡発掘調査報告書第16集 埼玉県教育委員会
 金子真土ほか(1982)「埼玉における古代窯業の発達(4)」『研究紀要』4 埼玉県立歴史資料館
 金子真土・石岡憲雄(1983)「埼玉における古代窯業の発達(5)」『研究紀要』5 埼玉県立歴史資料館
 蔵田蔵ほか(1967)「仏具」『日本の美術』16 至文堂
 栗原文蔵・田部井功ほか(1974)「下新田遺跡・荒神脇遺跡・熊野遺跡」埼玉県遺跡調査会報告第22集
 栗原文蔵・佐藤忠雄(1976)「水窪・新井遺跡の調査」岡部町教育委員会
 栗原文蔵・杉崎茂樹(1978)「原遺跡発掘調査報告書」埼玉県遺跡調査会報告第34集 埼玉県遺跡調査会
 古宮隆信・野村誠二ほか(1976)『中馬場遺跡第3次発掘調査報告』柏市教育委員会
 埼玉県史編纂室(1982)『新編埼玉県史 資料編2』埼玉県
 斎藤孝正(1981)「考察」『桃花台ニュータウン遺跡調査報告』Ⅲ 愛知県建設部・小牧市教育委員会
 坂詰秀一(1971)『武蔵新久保跡』雄山閣
 坂本和俊(1973)「羽笠」『此祀橋遺跡発掘調査報告書』埼玉県遺跡調査会報告第20集
 佐々木和博(1981)「市川市権原遺跡出土の須恵器」『市川市博物館年報』9
 笹森健一(1978)「住居跡について」『川崎遺跡(第3次)・長官遺跡発掘調査報告書』上福岡市教育委員会
 佐藤正好・川井正一(1983)『鹿の子C遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第20集
 塩野博・小久保徹(1975)『黒田古墳群』黒田古墳群発掘調査会
 塩野博(1980)「埼玉の古墳」『埼玉の文化財』20 埼玉県文化財保護協会
 塩野博・増田逸朗ほか(1981)「埼玉」『シンポジウム』関東における古墳出現期の諸問題 日本考古学協
 会

- 菅谷浩之(1980)「長沖古墳群の成立」『長沖古墳群』 児玉町教育委員会
- 杉原莊介・小林三郎(1971)「古墳文化—土師時代」『市川市史』第一巻 市川市
- 鈴木定明(1982)「柏市花前製鉄遺跡の調査」『研究紀要』7 千葉県文化財センター
- 高橋一夫ほか(1974)『前内出窯址発掘調査報告書』埼玉県遺跡調査会報告書第24集 埼玉県遺跡調査会
- 高橋一夫(1975)「園分期土器の細分・編年試論」『埼玉考古』13・14 埼玉考古学会
- 高橋一夫ほか(1979)『大山』埼玉県遺跡発掘調査会報告書第23集 埼玉県教育委員会
- 高橋一夫(1983a)「古代の製鉄」『講座・日本技術の社会史』5(採鉄と冶金)日本評論社
- 高橋一夫(1983b)「集落分析の一視点—入口と集落の道—」『埼玉考古』21号 埼玉考古学会
- 高橋一夫・宮島之(1983)「北武蔵の窯跡」『神奈川考古』14号 神奈川考古同人会
- 高橋美久二(1975)「長岡宮跡第61次(NIA地区)発掘調査概要」『京都考古』17 京都考古刊行会
- 高橋美久二・平良泰久(1976)「長岡京跡昭和50年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報1976』京都府教育委員会
- 田部井功(1976)『弥生吾新田遺跡』埼玉県遺跡調査会報告第29集
- 田中琢(1962)「土器」『平城宮発掘調査報告』Ⅳ 奈良国立文化財研究所
- 対馬郁夫・谷島一馬ほか(1978)『駒形遺跡発掘調査報告書』千葉県文化財保護協会
- 徳丸始朗・百瀬正恒(1976)「長岡京跡昭和53年度発掘調査概報」『埋蔵文化財発掘調査概報1976』京都府教育委員会
- 土佐雅彦(1981)「日本古代製鉄遺跡に関する研究序説」『たたら研究』24 たたら研究会
- 中沢悟(1981)「出土土器の分類と編年」『清里・陣場遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 楢崎彰一(1983)「猿投窯の編年について」『愛知県古窯跡群分布調査報告』(Ⅱ)愛知県教育委員会
- 野部徳秋・高木義和(1977)『末野窯跡(花園文群)発掘調査』大里郡寄居町教育委員会
- 服部敬史・福田健司(1979)「南多摩窯跡群出土の須恵器とその編年」『神奈川考古』第6号
- 服部敬史・福田健司(1981)「南多摩窯跡群における須恵器編年再考」『神奈川考古』第12号
- 服部敬史(1982)「南武蔵における古代末期の土器様相」『東京考古』1 東京考古談話会同人
- 服部敬史(1983)「南武蔵の窯跡」『神奈川考古』14 神奈川考古同人会
- 平尾政幸(1978)「平安宮左兵衛」『平安京跡発掘調査概報』京都市埋蔵文化財研究所
- 増田逸朗・小久保徹ほか(1977)『塚本山古墳群』埼玉県遺跡発掘調査報告書第10集 埼玉県教育委員会
- 増田逸朗ほか(1979)『下田・諏訪』埼玉県遺跡発掘調査報告書第21集
- 三友園五郎ほか(1973)『鹿島古墳群』埼玉県埋蔵文化財調査報告書第1集 埼玉県教育委員会
- 宮内勝巳(1983)「東京湾沿岸における奈良・平安時代土器の様相」『シンポジウム資料冊誌における奈良・平安時代の土器』史館同人・市川市考古博物館
- 山口直樹ほか(1982)「自然科学的手法による遺跡、遺物の研究2 千葉県における製鉄遺跡の研究」『研究紀要』7 千葉県文化財センター
- 大和修(1982a)「沼下遺跡の発掘調査」『沼下・平原・新堀・中山・お金塚・中井丘・鶴巻・水久保・路久保遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第16集
- 大和修(1982b)「中山遺跡の発掘調査」『沼下・平原・新堀・中山・お金塚・中井丘・鶴巻・水久保・路久保遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第16集
- 横川好富ほか(1977)『塚本山古墳群』埼玉県遺跡発掘調査報告書第10集 埼玉県教育委員会
- 横川好富ほか(1979)『電雷下・飯玉東』埼玉県遺跡発掘調査報告書第22集 埼玉県教育委員会
- 吉田恵二(1975)「土器」『平城宮発掘調査報告』Ⅳ 奈良国立文化財研究所
- 吉田恵二(1982)「緑釉陶と灰釉陶との相関関係とその編年について」『考古学ジャーナル』211 ニュー・サイエンス社
- 和島誠一・金井塚良一(1966)「集落と共同体」『日本の考古学』Ⅴ 河出書房新社

IX 付 編

1 台耕地遺跡出土土器の胎土分析結果報告

井 上 敏

1 実 験

1-1 試 料

分析に供した試料は第1表胎土性状表に示すとおりである。

X線回折試験に供する置物試料は洗浄、乾燥した後に、メノウ乳鉢にて粉碎し、粉末試料として実験に供した。

電子顕微鏡観察に供する置物試料は断面を観察できるように整形し、 $\phi 10\%$ の試料台にシルバークロームペーストで固定し、イオンスパッタリング装置で定着した。

1-2 X線回折分析

土器胎土に含まれる粘土鉱物および造岩鉱物の同定は、X線回折分析法によった。

測定には理学電機製X線回折装置を用い、X線管球、銅対陰極、フィルター、ニッケル、印加電圧一電流、30KV—15mA、スリット系、 $1^\circ-0.15\text{mm}-1^\circ$ の条件で行った。

走時速度は、 $2^\circ/\text{mm}$ 、フルスケールは800カウントとした。

なお、胎土の分析に先だって、原土と思われるローム質粘土の分析を行った。X線回折試験は原土、電気炉において 700°C 、 900°C で各々1時間焼成した試料（同一試料を石英ガラスに定着し、原土、 700°C 、 900°C と順次実験を行う）の3段階で実施した。その結果、組成上に大きな変化のないことを確かめた上で胎土分析を行った。ただ、 900°C 以上になった場合の組成については明らかではなく、今後の検討が必要である。

1-3 電子顕微鏡観察

土器胎土の組織、粘土鉱物およびガラス生成の度合いについての観察は、電子顕微鏡によって行った。

観察には日本電子製T-20を用い、倍率は $\times 45$ 、300、700、1500、4500の5段階で行い、察真撮影をした。

45~300倍は胎土の組織、700~4500倍は粘土鉱物およびガラスの生成状態を観察した。

2 実験結果の取り扱い

実験結果は第1表胎土性状表に示すとおりである。

第1表右側には、X線回折試験に基づく粘土鉱物および造岩鉱物の組成が示してあり、左側は各胎土に対する分類を行った結果を示している。

X線回折試験結果に基づく粘土鉱物および造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現われる各鉱物に特有のピークの高さ(強度)をmm単位で測定したものである。

ガラス量は大概 $2\theta=10^{\circ}\sim 20^{\circ}$ の範囲にあって、チャートが全体に腫れがあるブロードな現象を示す部分に対する面積で表示し、ガラス量の比較の材料とした。

電子顕微鏡観察によって得られたガラス量と、X線回折試験におけるガラス量とを比較対比し、さらにムライト(Mu)、クリバーライト(Cr)、などの組成上の組み合わせとによって焼成ランクを決定した。

2-1 組成分類

I) Mo—Mi—Hb三角ダイヤグラム

第1図に示す様に三角ダイヤグラムを①～⑬に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。

Mo、Mi、Hbの3成分の含まれない胎土は記載不能として⑭に含め、別に検討した。

三角ダイヤグラムは、モンモリロナイト(Mo)、雲母類(Mi)、角閃石(Hb)のX線回折試験におけるチャートのピーク高を、百分率(%)で表示する。

モンモリロナイトは $Mo/Mo+Mi+Hb \times 100$ で百分率として求め、同様にMi、Hbも計算し、三角ダイヤグラムに記載する。

三角ダイヤグラム内の①～④はMo、Mi、Hbの3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分よりなっていることを表している。

位置分類についての基本原則は第1図に示すとおりである。

II) Mo—Ch、Mi—Hb菱形ダイヤグラム

第2図に菱形ダイヤグラム①～⑱に分割し、位置分類を数字で表した。記載不能は⑳として別に検討した。

記載不能はモンモリロナイト(Mo)、雲母類(Mi)、緑泥石(Ch)、角閃石(Hb)のうち、④3成分以上含まれない、⑥Mo、Ch 2成分が含まれない、⑩Mi、Hbの2成分が含まれない、の3例がある。

菱形ダイヤグラムはMo—Ch、Mi—Hbの組み合わせを表示するものである。Mo—Ch、Mi—Hbの各々のX線回折試験のチャートの高さを各々の組み合わせ毎に百分率で表すので、例えば、 $Mo/Mo+Ch \times 100$ と計算し、組み合わせ百分率を記載したものである。

菱形ダイヤグラム内にある①～⑦はMo、Mi、Ch、Hbの4成分を含み、各辺はMo、Mi、Ch、Hbのうち3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。①—1と①—2は現在のところ大きな意味はないが、胎土分析の量が増えてくると位置分類上の区分が必要なものとなるかもしれない。しかし現在は①として一括して取り扱った。

位置分類についての基本原則は第2図に示すとおりである。